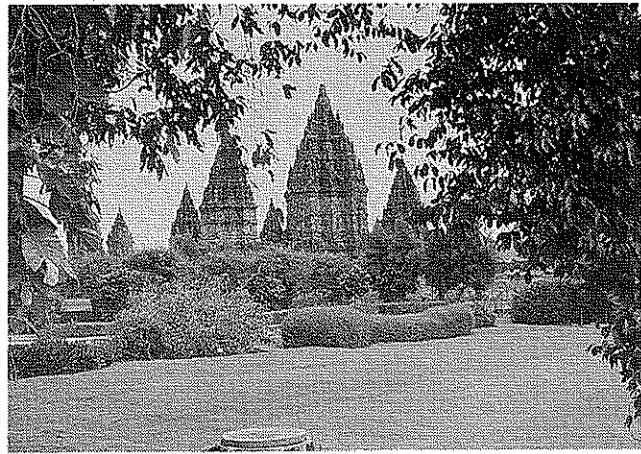
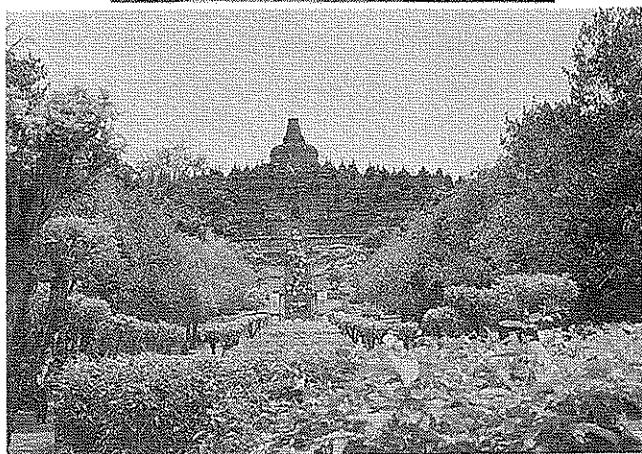
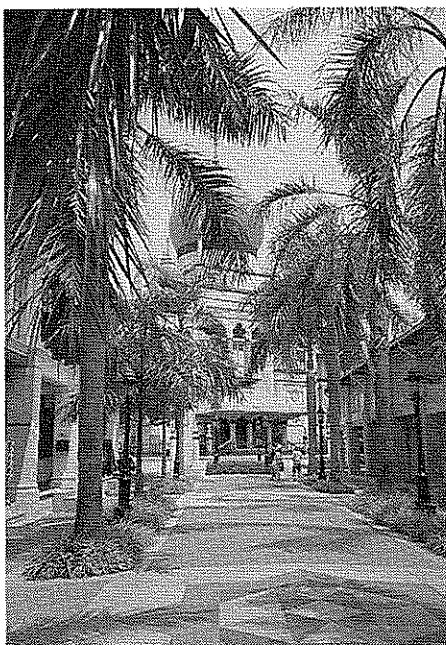


平成 9 年度  
国際文化学部異文化交流論研究室  
フィールドワーク報告書

# Paradise

シンガポール・インドネシア

1998. 3. 1 ~ 3. 10



## はじめに

今回のゼミ旅行計画は、平成9年の半ばにスタートした。その頃、ゼミではアジアを中心に勉強しており、また、テキスト「観光人類学」を読んでいたこともある、旅の目的地をシンガポールとインドネシアに決定した。二つの国との共通点の一つは、多民族・多文化が共存しているという点である。異文化交流論ゼミにとって、多民族国家の中で生きる人々の様子や社会状況などを実際に肌で感じ、かつ二つの多民族国家の性質を比較できる絶好の機会になると考えた。

まず、各自が興味のあるテーマを設定し、訪問先を決め、アポイントメントをとりにかかったのだが、返事が来るのが遅いものもあり、思ったようにはなかなか進まなかった。同時に、ガイドブックを何冊も読み比べ、見たい・行きたい・食べたいなどの希望をもとに、スケジュールをたてた。ホテルから食事、交通費まで細かく予想し、移動の時刻も入念に決めておく。ホテルの予約や交通手段のチェック、訪問先のアポイントメントはすべて現地とのFAXのやり取りで進めたが、交渉や確認には何かと時間がかかった。各訪問先でのインタビューに備えて質問内容を準備するとともに、週に一回、通称「ゼミ英語」なるものも始めた。訪問先の職員や大学生と話をする際に、英語が会話の手段となることは明らかだったが、当時の状況では何も話せないのが目にみえていたからである。そこで毎回トピックを決めて英語を使う練習をし、随分上達したと思って出かけたのであるが、その後旅行先で自分たちの甘さをつくづく実感することになった。

ところで、最近のインドネシア情勢の悪化を見て、私達がなぜ危険な地域をあえて選んだのだろうかと疑問に思われた人もいるだろう。実際私達が計画を立てた当初は、これほど悪化するとは夢にも思わなかった。年も明けて3月の出発日が近づくにつれて、通貨ルピアが暴落し、日本人観光客2名が強盗に遭うなどの事件が起こった。インドネシアに到着する頃は、丁度大統領選挙を間近に控えており、私たちの不安も少しずつ大きくなつたのは確かである。しかし、外務省の警告指数は安全圏内であり、訪問先の一つであるJICAでは、国内課の担当者、またインドネシア事務所の担当者の方々が常に連絡を下さり、安全圏内と判断されていたため、旅行を決行することになった。いざインドネシアに着くと、警備体勢がしかれていたせいか、心配したほど治安は悪く見えなかつたが、今思えば、「嵐の前の静けさ」だったのかもしれない。

3月10日の選挙では、スハルト大統領が当選し、約30年にもわたる独裁的政権が再び続くかのように見えた。しかし、経済の低迷と大統領の縁故主義に対する人々の不満がつのり、学生をはじめとして、ついに人々が沈黙を破り始めた。自分達が実際に行った場所がテレビのニュースで報道される度、人々で埋め尽くされ、荒れたその変わり様に驚き、同時に現地でお世話になった日本人の方や学生達の無事が気にかかる。そしてついにスハルト政権は崩壊し、代わってハビビ新大統領が就任した。今までのように、国家原則や憲法に対する反論を禁止することは、300以上の民族からなる多民族国家を統一する一つの手段でもあった。しかし、激動の社会状況の中、国際社会から民主化を求められているインドネシアは、これからどのように新時代に向かっていくのだろうか。こうしたなかで、インドネシアと日本は無関係ではない。インドネシアは日本が必要な資源の供給国である。さらに日本は、ODAでスハルト政権の開発政策を支えてきた。政権交代となった今、日本の支援のありかたが問われ、これから益々お互いの協力が必要となるだろう。

この旅行記は、私達が実際に見たこと、体験したこと、現地の人々や、日本と各国の掛け橋として活動する人々との出会いが詰まっているのです！これを手にされた方々に、連日の報道で表わされる情報やイメージだけにとらわれず、私達が見て感じた多くのインドネシアとシンガポールの文化的、社会的側面を知って戴けたら幸いだと思います。最後に、私たちのゼミ旅行に大きな力を貸し下さった多くの方々に、心から御礼申し上げます。

平成10年6月1日

岩崎綾子

# 目 次

は じ め に

岩 崎 綾 子

## I. 大学、関係機関の訪問について

1. シンガポール国立大学 (NUS : The National University of Singapore)、 英語コミュニケーション・センター (CELC : Centre for English Language Communication) を訪ねて	采 野 恵 ..... 1
(1) シンガポールの朝	
(2) 訪問の目的	
(3) センターの概要	
(4) シンガポールの学生の英語力について	
(5) 講義に参加してみて	
(6) 自分自身を振り返って	
2. JICA 国際協力事業団調整員・青年海外協力隊員の訪問	山 田 有紀恵 ..... 4
(1) 国際協力事業団 (JICA) とダルマ・プルサダ大学 (Darma Persada University) の訪問にあたって	
(2) インドネシアと日本のつながり	
(3) 調整員について	
(4) 司書隊員について	
(5) 調整員と協力隊員に会って	
3. ボロブドゥールとプランバナン	浅 野 昌 子 ..... 7
(1) ボロブドゥールへの道	
(2) ボロブドゥール・プランバナン遺跡群について	
(3) JICA の公園化事業について	
(4) 公園化事業の跡をみて	
(5) おわりに	
4. 海外の日本語教育現場訪問 —シンガポール・ポリテクニックとダルマ・プルサダ大学—	岩 崎 綾 子 ..... 11
(1) はじめに	
(2) シンガポール・ポリテクニック：日本語コース	
(3) ダルマ・プルサダ大学：日本語学科	
(4) おわりに	
5. 財団法人自治体国際化協会 (CLAIR : Council of Local Authorities for International Relations)	石 原 理恵子 ..... 16
(1) はじめに	
(2) 財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) とは	

- (3) 海外事務所の展開・活動
- (4) 國際交流・協力事業の推進：自治体国際協力センター
- (5) JET プログラムの実施
- (6) 人材育成
- (7) インタビュー
- (8) インタビューを終えて

## II. 異文化ミニ体験記

1. シンガポール見て歩記	
(1) 美しい街 シンガポール	M. A. ..... 20
(2) 足エステ	M. A. ..... 21
(3) セントーサ島	M. A. ..... 21
(4) アラブ・ストリートとリトル・インディア	A. I. ..... 22
(5) イースト・アンド・ウエスト	M. A. ..... 22
2. インドネシア見て歩記	
(1) ベチャ	M. U. ..... 23
(2) ジュース売り：その1	M. U. ..... 23
(3) イモギリ体験	Y. Y. ..... 24
(4) ジュース売り：その2	M. U. ..... 25
(5) 物売り	A. I. ..... 25
(6) インドネシアの芸能	R. I. ..... 25
(7) ラーマヤナ・メイク	R. I. ..... 26
(8) ジャカルタ：コタ地区	M. U. ..... 27
(9) ポロブドゥールを実感	A. I. ..... 27

## III. 食は東南アジアにあり

1. シンガポール編	采 野 恵 ..... 29
(1) 機内食	
(2) シンガポール料理	
(3) ホーカーズ	
(4) ハイ・ティー	
2. インドネシア編	山 田 有紀恵 ..... 31
(1) カクテル	
(2) ピュフェ式朝食	
(3) ホカホカ弁当	
(4) 生バンドの演奏	

おわりに

浅 野 昌 子

# I. 大学・関係機関の訪問について

3年後期は、4年で行う卒業研究のテーマをあれこれ考え始める時期にあたる。そこで、テーマを絞るために、ひとまず各自が興味のあるテーマを選び、文献考察と資料収集を行ってみるというミニ・プロジェクトを行った。

フィールド・ワークを利用して、ミニ・プロジェクトに使う資料の一部を収集しようと試みたメンバーもいる。ここに報告したのは、主としてこのような動機で選択された訪問先である。

## 1. シンガポール国立大学 (NUS : The National University of Singapore)、英語コミュニケーションセンター (CELC : Centre for English Language Communication) を訪ねて

### (1) シンガポールの朝

シンガポールで迎える朝。昨日は日本にいた自分、今朝は赤道付近にいる自分というのも、ちょっと不思議な気がする。フィールド・トリップに出て最初の訪問先で、しかも自分が中心となって英語でのやり取りをしなければならないということで、何か心の中にピンと張り詰めたものを感じる。宿泊先のYMCAを出発する前に、30分ほど簡単なミーティングを行い、最終的にまとめた質問表を全員に配ってインタビューの最終調整をする。「ゼミ英語の時のように、とにかく話そう」と確認し合う。

お土産に持参した日本画の色紙を手に、いざ出発！ MRT乗り場までわずか数分程度だが、かなり暑い。朝だというのに、もう額に汗が噴き出す。12度の日本から、一気に32度もあるシンガポールにやって来て、まだ感覚が慣れていない。と思うと、MRTの中は異常にクーラーが効いて寒い。ノースリーブだとたちまち鼻風邪をひいてしまう。シンガポールでは、何よりもまずこの温度差に慣れなくてはならない。

MRTが地上に出て、車窓から高層ビルと緑の木々が見えてくる。昨夜は夜景の美しいシンガポールに到着したのだが、こうやって日の光の中でビル群を見ていると、「ガーデン・シティー、シンガポールにやって来たんだ！」という実感がだんだん沸いてくる。クレメンティ駅に着き、路線バスに乗り換える。MRTとバス兼用カードを買って乗車したが、カードの使い方が分からず一騒動。そんな私たちを後目に、どんどん乗客が乗ってくる。よく見ると、表(絵が書いてある方)がMRT用で、裏(青色)はバス用となっていて、非常に効率的。カードを入れて運賃表のボタンを押す自己申請制になっており、日本のように乗車時と降車時にカードを通し、自動的にお金が引き落とされるのとは異なっている。

しばらくすると、NUSのキャンパスが見えてきた。

采野 恵

学部によって停留所が異なるほど大きなキャンパスだ。メイン・ライブラリー前のバス停で降り、警備員に道順を開く。CELCに行く途中、キャンパス内のあちこちに置かれたベンチで勉強している学生たちの姿が目に付いた。暑い国だけに緑が多く、珍しい花も咲いていて、エキゾチックな感じが漂っている。いよいよインタビュー。



スタッフ用プール

### (2) 訪問の目的

シンガポールは中華系、マレー系、インド系など様々な民族が共存する多民族国家である。公用語は英語で、小学校、中・高校、大学教育は英語で行われている。一方、家庭においてはそれぞれの母語が話されるという状況にある。現在、国際社会のグローバル化が進む中、国際語としての英語が主要なコミュニケーションの手段として使用されている。

一方、私たちも中・高校、大学と英語を約9年間学んできたのだが、現実には十分に使いこなせないでいる。そこで、英語を母語としないシンガポール人がどうやって英語を学んでいるか、また特にシンガポールに留学した学生に対しどのような英語教育がなされているのかを調べることにより、私たち自身の英語力向上の動機付けになればと思い、今回の訪問となったのである。

この日の日程は、以下のように設定された。

11:00am - 12:00pm

Dr Mary En Tzeと、英語教員2名からセンターの説明を受ける

12:00pm - 13:00pm

スタッフの厚生施設見学後、スタッフ4名と会食

13:00pm - 14:00pm

施設見学（図書室、ビデオルームなど）

14:00pm - 15:30pm

講義に参加

### (3) センターの概要

CELCは、1979年にEnglish Language Proficiency Unit (ELPU)として設立され、NUSでは学部を持たないTeaching Departmentとなっている。NUSの全学部から一定の英語レベルに到達していない学生が、ここで英語能力向上のためのコースを受講するシステムをとっている。センターのねらいは、

- ・ 学生の英語力（アカデミック・スキル）を伸ばすこと、
  - ・ 学生の就職先に見合った、学問的あるいは職業的な英語コミュニケーション技術を伸ばすこと、
  - ・ 留学生など、特定の目的を持つ学生に英語教育を供給すること、
  - ・ 言語教育と教授法に関する研究を行うこと、
- である。

具体的には、このセンターは大学の7つの学部のために22種類のコースを用意している。学生の英語力を伸ばすように異なったレベルを設定し、あるコースは進学者のために、そしてあるコースは職業のためにといった具合に細かく分かれている。また、大学の要請によって特別の研究会やプログラムを実施し、修士や博士課程で学ぶ学生の英語力の支援も行っている。センターには46人の専任講師と非常勤講師がいる。専任講師の出身は、シンガポールだけでなく、オーストラリア、イギリス、マレーシア、ニュージーランド、フィリピンそしてアメリカ合衆国など多岐にわたっている。

各学部・学科によって英語教育に対するニーズが非常に異なっているため、センターは大学の全学部のパイプ役として、全体のコーディネートを行なう役目を担っている。責任ある3つの委員会を設け、そういった異なったニーズを把握し、教育を行い、ニーズにあったものになっているかについては各学部・学科と一緒に評価をしていく。3つの委員会とは、コース委員会、テスティング委員会、ワークロード委員会である。コース委員会には2つの役目があり、1つはCELCのコース

の批評、もう一つは評価に沿ってコースの変更を促す役目である。テスティング委員会はCELCのスタッフによって準備されたすべての試験を監督する議長役を行う。最後にワーカロード委員会の役目は、センターと各学部の間で公平に義務を分配するための提案をしたり、それぞれにフィードバックを行う。これらの3つの委員会が、各コースのコーディネーターと一緒に綿密な打ち合わせを行い、たくさんの講師の異なった仕事が合理的に機能するような運営をするのである。

センターの設備としては、スタッフ・ルームの他、プレゼンテーションの練習など行うコミュニケーション・スキルルームや、図書室、コンピュータールームなどがある。

### (4) シンガポールの学生の英語力について

今回のインテビューでは、シンガポールの学生は小学校から英語教育が導入されているために、大学レベルでは高度なレベルで英語コミュニケーションができるようになっていることが分かったが、同時に、大学レベルで要求される英語力に到達していないとみなされる学生も多くおり、そういった学生を随時試験を通して抽出し、フォローアップするシステムが大学内にあることも分かった。英語でエッセイや論文を書くことが要求される各コースで、厳しい競争の中を生き残っていくためにも、また、英語でビジネスを行うなどの職業能力を獲得するためにも、大学内にこういった英語教育のセンターがあることは、学生たちにとって非常に心強いことだと思う。

### (5) 講義に参加してみて

私たち日本人は、第二外国語 (English as a Second Language) として英語を学ぶシンガポールの学生より、外国語 (English as a Foreign Language) として英語を学ぶ留学生に状況が似ている。そのため、シンガポールに来てまだ2ヶ月目という中国人留学生のクラスを見せてもらうことになった。彼らはシンガポールに来た当時、読み書き能力は優れているが、聞き取りや会話はほとんどできない状態だったということで、私たちと同じ境遇にあった。そこで、私たちと同じような悩みを持つ彼らがどのようにして英語を学び、自分のものにしていったのかを知ることは、私たち自身への大きなヒントになると考えたのである。

#### ① 対象：中国人留学生

（上海・広東出身者別の2クラス）

留学生といってても、普通の外国人留学生とは異な

る性質を持つグループの授業に参加させてもらった。この2つのクラスは、シンガポールの企業が中国の高校2年生を対象に行った選抜試験に合格し、文部省から選ばれたエリート40名を対象に開講されている。これらの高校生はシンガポールの企業と12年間の契約を結んでおり、シンガポールの企業は国内だけでは貰えない優秀な人材を広く中国大陆から「輸入」し、長い目で人材育成を行なおうというプロジェクトの一貫として、これら40名の学生を受け入れたものであるという。シンガポールでの生活費やNUSの授業料などすべては、シンガポール企業が負担している。

まず彼らは、NUSにあるこの英語センターにおいて1年間英語の集中講義を受ける（中国の高校の2年生に相当する時期）。更に次の1年間は、大学でコンピューターなどの単位を所得する（中国の高校3年生に相当する時期）。それからNUS内の希望学部に進学して4年間学び、卒業後6年間はシンガポールの企業に勤めなければならないという条件がつく。その後は中国に戻ろうが、シンガポール企業で就職し続けようが自由である。

高校2年で親元から離れ、成功を求めて12年間もの長い間を外国で暮らすを選んだ中国の若者達。そして、このような長い目で人材育成を行おうとするシンガポール政府と企業。そこに、中国人あるいは華人といわれる人達の遠大なる物の考え方を見て、感心すると同時にゾッとするものを感じた。高校生一人ひとりの童顔の中に、国際競争に打ち勝つために選ばれた超エリートという自負心の強さを見た。

## ② 上海組

「このクラスの学生は非常に優れている」との前評判を聞いていたが、全くその通りであった。シンガポール人の大学生が1年をかけて1冊のテキストをこなすのが精一杯なのに対し、彼らはたった6ヶ月で4冊をもこなすという。早朝から一日中英語の授業を受けた後は、自習時間が午後7時から9時まで設けてあり、一日中英語づけになるようにプログラムが組まれている。クラスで中国語を話すと20セントの罰金制度があり、お互いに英語だけの生活を作り出すよう心がけているようである。

講義はすべて英語でなされ、展開も非常に早く、スムーズに進むところが印象的であった。予習がきちんとされていないと授業にはついていけないことが予想される。「超エリート」の彼らには競争心がみなぎっており、英語力向上への強い意志が伺われた。

余暇の時間にはラジオやテレビのニュースなどを聞き、口まねをして英語を聞いたり話したりする力をついているそうである。

授業に参加したが、日本と中国について次々と質問が浴びせられ、こちらが一つ質問すると全員が口々にあれこれと答えや考えを返ってきて騒然とした状態になる。20人全員が一度に英語で答えを返してくるような、ものすごい状況に圧倒されるばかりである。反応が非常にスピーディーで、十分な英語コミュニケーション能力のあることがわかった。これらの高校生が、たった2ヶ月前までは英会話の全く出来ない状態だったとは、とても想像できない。本人達の意気込みもさることながら、2ヶ月でここまで英語コミュニケーション能力を伸ばす環境を提供しているセンターの秘密は何であろうかとつくづく思った。

## ③ 広東組

ピンと張り詰めた空気が流れている上海組とは異なり、こちらは非常に和やかな雰囲気で授業が展開されていた。20人の学生が5つのグループに分かれ、英会話を中心としたロールプレイを用いて、クイズ形式で動詞や形容詞などの使い分けを学んでいた。このクラスでは習ったものをすぐ使うことを念頭に授業が実践されており、その場で各々が声に出して練習をするといった自主的な態度にあふれていた。英語を自分のものにするためには、授業が楽しいものであること（参加型の展開など）が必須であり、学習者の積極的な態度が大切なのだということを彼らからあらためて教わった。

英語の文法説明はすべて英語で行われ、私たちもついていけないような高度な内容で授業が展開されていたが、ロールプレイのおもしろさに全員が熱中し、時にはうるさいほどまでに会話が盛り上がり、クラス全員が英語での会話に集中している様子は印象的であった。この高校生たちも、2ヶ月前までは全く英会話ができなかっただという。教師はどのグループにも公平に注意を向け、一人ひとりが参加しているかに気を付けながら常に声をかけて励ましている。何千人、何万人の中から選ばれた20名という超エリートなのだが、「個人の能力」プラス「教育環境」の重要さ、そしてスタッフの能力の高さが鍵なのだと思いながら、強いショック状態でNUSを後にした。

#### (6) 自分自身を振り返って

このセンターは組織上においても、また教材やテキスト類、教授法などにおいても、あらゆる面がシステム化されており環境整備がなされていた。それぞれのコースの目的がはっきりしているので、教員も学生も到達目標がわかりやすい。英語教育に関してこのようにセンターとして独立して存在していると、教育も研究も積み重ねがなされやすく、またそこで学ぶ学生側としても非常に心強いと思う。ネイティブの教師もいたが、特にシンガポール人の教師陣が英語教育にかける情熱には大変なものがあった。

実際に中国からの留学生の勉強ぶりを見、授業にも参加させてもらったのであるが、ついていけない現実があった。まず何よりも、英語に取り組む姿勢が私た

ちと異なっていた。彼らには国を代表する選ばれたエリートとして生きていかなければ（戦い抜いていかなければ）ならないという使命感があるにしても、もっと私たちは私たち自身の意識、すなわち何のために英語を学ぶのかという意識を高めていく必要があるようだ。今回の訪問を通して、自己意識の低さ、かつ語学力の無さを痛感した。これを思いにとどまらせておくのではなく、これをステップにがんばっていきたい。

尚、フィールドワークについては、カメラやテーブルコーダーの準備がスムーズに行かず、必要な場面で手間取ってしまった。円滑にインタビューを進めるために、念には念を入れた準備が必要であると同時に、場面や予想外の展開によっても柔軟にインタビューの体制を変更できる判断力の早さが必要だと感じた。

#### 参考文献

- ・ National University of Singapore, 'Centre for English Language Communication : Handbook 1997 - 98'.
- ・ 鍋倉健悦 「知的交流のために コミュニケーションの英語」 丸善ライブラリー 1995年
- ・ 田村慶子 「頭脳国家シンガポール」 講談社現代新書 1993年
- ・ 田辺洋二 「学校英語」 ちくまライブラリー 1990年
- ・ J.V.ネウストプニー著 「外国人とのコミュニケーション」 岩波新書 1982年

## 2. JICA 国際協力事業団調整員・青年海外協力隊員の訪問

(1) 国際協力事業団 (JICA) とダルマ・プルサダ大学 (Darma Persada University) の訪問にあたって  
ホテルから JICA インドネシア事務所へ、そしてそこからダルマ・プルサダ大学へは、自分たちでミニバスをチャーターして移動することになっていた。現地の旅行社とファックスでやり取りする時に、住所を知らせて「場所は分かるか」と聞くと、「ペテランの運転手がちゃんと見つけるから大丈夫」という返事が来た。が、あまり信用は出来ない。そこで、事前に JICA から地図をファックスで送って貰っておいた。

早朝、ホテルの玄関にミニバスが来ている。「よかったです！」。昨晩確認の電話を入れておいたのだが、本当に来るかどうかは、来てみるまでは分からない。バスに乗り込むと、運転手が「どこに行くのか？」と聞いてくる。住所を言っても、「そんな所は知らない」と言う。「ああ、やっぱり！」

事前に入手していた地図を見せて、やっと行き先が分かったらしい。ともかく出発できる。バスから見るジャカルタの街並みは、熱帯雨林気候そのもので、緑が

山 田 有紀恵

濡れた感じがする。街路樹の世話をすると、通りを掃除する人などを、あちこちでみかける。選挙前だったせいか、市内には警官や軍隊がいたるところにおり、これだけいれば安全かなと思う反面、これだけの警備を動員しないと治安が維持できないような危険なところに来てしまったのだと痛感した。ジャカルタの交通事情については、二車線の道路を三台の車が走るという状態で、なにがどうなっているのか分からぬほど車やバイクがゴチャゴチャ走っていて、割り込みも多い。もちろん渋滞もひどいし、交通事故も多いそうだ。道路は直線で U ターンすることができないように規制されており、一度曲がり角を間違えると大きく回り道をすることになる。実際、私たちも JICA 事務所を右側に見つけながらも U ターンができず、かなりの大回りをすることになった。おかげでジャカルタの目抜き通りの市内観光ができたのだが、20 分遅れで事務所に到着することとなった。

金ピカの「菊のご紋」が目印の日本大使館の真ん前に、JICA ジャカルタ事務所はあった。ここで説明を受

けた後、固山調整員とともにミニバスでダルマ・プルサダ大学に向かった。ジャカルタには数百もの大学があり、それぞれの規模は小さいという。インドネシアでは、大学に行くことができるは経済的に余裕のある人々だけだとも聞いた。ダルマ・プルサダ大学はジャカルタ郊外に車で1時間程出た所にある。「この辺りの道路は、暴動が起きると閉鎖される所です。今回も、ここが通れるか非常に心配した」という固山調整員の話に車外を見ると、スラムが広がっている。埃の多いでこぼこ道、雨が降るとぬかるみとなる道をミニバスは走っていく。先ほどまで目についていた市内の超高層ビル群、高級デパートやホテル、惜しげもなく水を吹き上げる大噴水などとの落差はあまりにも大きい。

私たちが訪問した日は、大統領選挙前に大学や企業、工場などで政治集会が行われるのを防ぐために、政府が急に1週間の休業を宣言していた。そのためか、どこでも手持ちぶさたそうな人々がブラブラ歩いている。休みにもかかわらず、大学の配慮で日本語学科の学生や卒業生たちが集まってくれていた。この日の日程は次の通り。

9:10am

JICA インドネシア事務所到着後、固山調整員と面会  
諒訪所長の講話

「インドネシアでの協力隊の活動について」

「異文化交流とは」

10:00am

JICA 出発、車中にて調整員の仕事について質問

11:00am

ダルマ・プルサダ大学到着、会議室にて小池実花  
司書隊員と面会

国際部長、学生、卒業生と交流

11:40am

図書館・日本語学科棟・コンピューター室などを  
見学

12:30am

副学長主催の昼食会

学生との個人的な交流、学生と住所の交換など

13:30am

大学発

## (2) インドネシアと日本のつながり

インドネシアと日本の交流は江戸時代にまでさかのぼることができる。正式な交流は、徳川時代の長崎とオランダ東インド会社の間の物資の流れで、オランダ領であったインドネシアからたくさんの物資が日本に

送られたという。第2次世界大戦中、日本軍は1週間でインドネシアを占領。軍政下の日本語教育、収容所や従軍慰安婦問題もある。今日ではニューヨークにつぐ大手の貿易相手国となっている。天然ガス、石炭、石油などの地下資源はインドネシアに依存しており、例えばインドネシアからの天然ガスの輸入が1日止まれば、大阪、東京の電気はすべて止まってしまうという状況にある。

インドネシアの青年海外協力隊については、平成10年3月1日現在の協力隊員の数は65名（内女性隊員30名、シニア隊員4名）で、長期・短期を含めた個別専門家が110名、プロ技術協力が104名となっている。協力隊よりもその他の専門技術協力で来ている人の方が圧倒的に多いといえるが、いずれにしても家族も含めると合計550名という大量の国際協力関係者を送り込んでいる。協力隊員で多い活動内容は、看護婦、針灸マッサージ、日本語教師、村落開発普及員、電気機器、養護、司書隊員などの順となっている。針灸マッサージや指圧師は、教えたことが直接現地の人々の収入につながるので人気が高いという。また、ホテルや観光地での日本語教師の要請が高まっているそうである。インドネシアは大小の島が多く、様々な地域で活動をする隊員の間を4名の調整員がパイプ役となり、連絡調整や活動支援などを行っている。

このJICA インドネシア事務所では、大きな視察団を月に2回程度、小さなものは週に1グループ程度受け入れているが、受け入れの事前交渉から始まって、かなりの時間を視察受け入れに割いている現状にある。

### (3) 調整員について

調整員としての仕事は、援助協力の要請に応じてインドネシアの企業や公共施設を視察し、本当に隊員が送れる状況にあるのかを調査したり、視察の交渉をしたり、JICAの専門員の世話をしたりと多岐にわたる。以前、インドネシアのカリマンタン島で飛行機が墜落し、JICA専門員が死亡した時には、このJICA ジャカルタ事務所すべて対応し、大変だったそうである。

固山調整員の場合は現職参加の形で派遣されたF県の県庁職員で、日本に帰ったら県庁職に戻るそうだ。こういう形で調整員が派遣されたのは固山隊員が初めてだそうである。調整員も協力隊員と同様に、日本国内で研修してから配属される。派遣先での住居は自分で探さなければならない。ジャカルタ市内で310ドル、郊外で240ドルくらいの家賃が通常だという。固山調整員のように現職参加であれば、給料が保障されてい

るため生活には困らないが、協力隊に支給される生活費では現地並みの生活がやっとという人も多い。

日本国内で行われる約3ヶ月の研修は、現代の若者のライフスタイルに合わせて贅沢なものになってきていると感じるそうである。例えば、個室にしないと協力隊に応募する者がいなくなるとか、隊員が国際電話のかけられる携帯電話を持ちたがるとかいう状況があり、なぜ途上国に行こうとしている隊員にそのような環境を用意しなければならないのか、疑問に思うそうである。

インドネシアで暴動などの非常事態が起った場合、緊急避難用に自衛隊が派遣されると助かる。日本国内でこの問題が活発に討議されていて反対する人が多いと聞くが、実際に海外で危険と隣り合わせで活動をしている人々には切実な問題なのだと力説されていた。

#### (4) 司書隊員について

小池隊員は、1996年7月からダルマ・プルサダ大学に司書隊員として派遣されている。要請された仕事への期待感と、現地に入ってからの実際の仕事との間に差はないそうで、幸運な派遣事例の一つと考えられる。図書館には約1万部の蔵書があり、そのうち日本の本が3千部。学術書、辞書、事典など色々あるが、学生たちの間で特に人気があるのはファッション雑誌類。これらはインドネシア在住の企業などからいらなくなつたものをもらっているそうだ。これら日本の書籍を整理することが彼女の仕事である。彼女が図書整理に用いたシステムはDDC21というアメリカのシステムで、これは以前からダルマ・プルサダ大学の図書館でも用いられていた手法である。大学図書館の利用者は在学生、卒業生、教師がほとんどで、一般には貸し出ししていない。貸し出しがカード方式で行っていて、図書館には3台のパソコンとプリンターが設置されているが、主にワープロとして活用されているだけである。

小池隊員自身が仕事をする上で大変なことは、言語と文化の違いだという。協力隊の活動の上で一番大変なことはやはり言語の問題。派遣前に日本で約3ヶ月間の語学の特訓があり、ジャカルタに着いてからは学生にインドネシア語を教えてもらったそうだ。しかし、言葉の使い方で誤解があったり、意味が通じないなどいろいろと乗り越えなければならない壁があったという。私たちの通訳を引き受けて下さり、インドネシア語に何の問題もないように見えたが、そこまで到達するまでの努力が感じられた。インドネシアの人々は礼儀正しくプライドが高く、公私をはっきり区別していて、仕事以外で同僚と時間を共にすることはないと

う。また、仕事が細かく分業化されており、自分の仕事以外はやろうとしないため、効率が悪いようである。ただ、他の職員と同様に扱ってくれるので、協力隊で派遣されたということを意識しないで活動できるのが良いようである。インドネシアでの生活も他の隊員に比べると暮らしやすい方で、仕事も充実しているし、食べ物に關しても問題はないようである。協力隊員が入院した場合、その費用は全額JICAが負担してくれるので安心だそうだ。

協力隊の存在については高校生の頃から知っていたが、司書になってからも広い世界が見たくて応募したそうだ。2年間の派遣は彼女にとってちょうどいい長さで、帰国したら現職参加なので司書の仕事に戻るそうである。



司書隊員を囲んで

#### (5) 調整員と協力隊員に会って

インドネシアへの協力隊員派遣は少ないと聞いていたが、実際には多くの人々が幅広い分野で活動していることが分かった。国際協力に携わる人の数も重要だが、一人ひとりの活動の充実度も大切なのだと感じた。また、インドネシア中に広がる活動地域を把握し、協力隊員の安全を確保し、活動しやすいように配慮する調整員の仕事は、本当に大変だと痛感した。現在インドネシアの情勢はたいへん危険なものになってきており、協力隊員を集めて安全に生活するためのセミナーを開いたりするなどの努力をしているそうである。暴動が起きた地域では、既に一人の隊員が日本に緊急帰国したということで、いかに生活が危険になっているかが感じられる。この様な状況での活動は、私たちが想像もつかないほどの苦労が伴うはずである。お二人に会って、海外で、そして途上国で働くと言う事はどういうことなのか、あらためて考えさせられた。

## 参考文献

- ・国際協力事業団 「地球の明日を見つめて」
- ・国際協力事業団インドネシア事務所 「1996年度（平成8年度）対インドネシア技術協力及び無償資金協力実績」  
1997年
- ・青木 公 「ODA最前線：国際協力専門家、その素顔」 1997年
- ・時事通信社編 「異文化との接点で：草の根協力の最前線から」 1996年
- ・山口県青年海外協力隊OB会、山口県協力隊を育てる会 「海を越えた青春：パートⅡ」 1991年
- ・国際協力事業団青年海外協力隊事務局 「青年海外協力隊の歩みと現状：その20年」 1985年

## 3. ボロブドゥールとプランバナン

### (1) ボロブドゥールへの道

インドネシアの古都、ジョグジャカルタの朝は小鳥のさえずりとともに明ける。ホテルの窓からは朝露に濡れた緑の木々が美しく、プールサイドで水をまいている従業員のゆったりした動きが眼下にある。ベランダに置かれた白い椅子に腰掛け、遠くに続く山々を眺めながら、朝の空気を吸い込む。今日も暑くなりそう。

前日手配したミニバスに乗り込む。ボロブドゥールへは車で約1時間。両側に商店が並ぶ大きな道路を行くうちに、水田に囲まれた一本道へと変わる。のんびりとした田舎の風景が続き、サトウキビ畑や椰子の並木道、田植えの終わった水田などが広がっている。経済危機の今日、こうした地方での暮らしの方がかえって楽なのではないかとガイドさんに聞くと、土地を持っている人は良いが、土地を持たない小作の人々は大変なのだと言う。のんびりした風景の向こう側に、観光客の私たちには見えない日常生活の厳しさがあるのだということを知る。

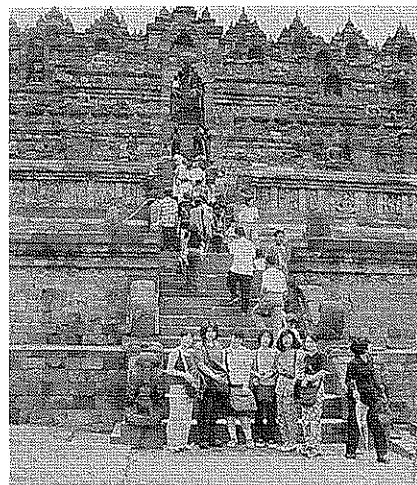
ホテルを出発してから約1時間後、私たちの乗ったワゴン車はムンドゥ寺院に着いた。昔、ボロブドゥールへ向かう仏教徒は、このムンドゥ寺院を含めた2つの寺院に立ち寄ってお参りをし、ボロブドゥールに向かう準備をしたのだという。すべて徒步による巡礼であった。山や川を越えてやってきた信者達は、これら2つの寺院で身支度をし直し、それから最後の山を越えてボロブドゥールに向かったという。それは険しい山や川を自分の足で越えて行くという苦行を成してはじめて、ボロブドゥールという悟りの境地にたどり着けるという教えによるのだそうだ。今、この小さなムンドゥ寺院を訪れる観光客は、あっという間にみやげ物を売り歩く人たちに囲まれ、それらを断りながらやっとのことで寺院を参拝し、それからまた四方八方から取り巻いてくるみやげ物売りの人々と奮戦し、やっとの事で

浅野昌子

車にたどりつくという苦行に直面するというしきみになっている。車に乗ってもまだ窓の外で話かけてくる人もいるが、一人から買うと、「買ってくれる人」というレッテルが貼られ、益々取り巻かれるという悪循環に陥る。

その人たちのものすごいパワーに圧倒されながら、私たちは一路ボロブドゥールへと向かった。ムンドゥからボロブドゥール史跡公園まではあつという間だったのだが、昔は歩いて何時間もかかる巡礼の旅だったそうだ。駐車場から入園ゲートまでの道のりがまたすごい。物売りの人混みの中を「ノー、サンキュウ」を繰り返しながら歩いて、ボロブドゥールを見る前に疲れた、という感じになるくらいであった。しかし、そんな疲れもボロブドゥールを見た瞬間ふっとんってしまった。遠くからでもすごく存在感があった。それは近付けば近付く程増していく、立ちすくんでしまいそうなほどの大莊厳さであった。この巨大な遺跡を真近で見ることができた感動を、私は一生忘れないと思う。

夕暮れの迫る頃、私たちはプランバナン遺跡群に到着した。物売りの多い正面入口を避け、裏門から入場すると、夕闇の中に幾つもの寺院の屋根がそびえ立っている。その静かなる雰囲気は、ボロブドゥールの華やかさとはまた違った莊厳さを醸し出していた。修復が完成した中央の寺院群と、その回りに修復

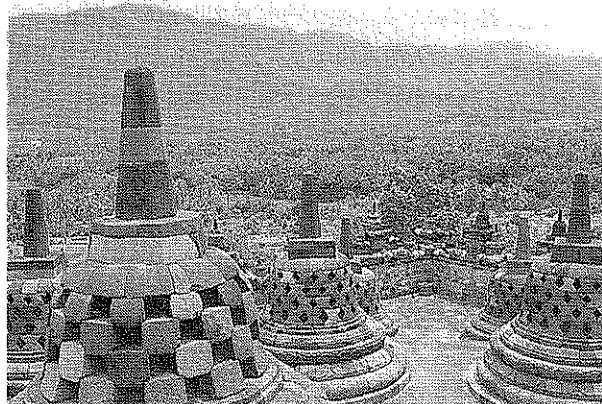


「色界」に立つ

を待つ何百もの遺跡の跡があり、それ全体が公園として整備されていた。季節によつては、夜ここでラーマヤナが上演されるのだという。そんな時期にもう一度訪れたいと思わせる寺院のたたずまいであった。

### (2) ボロブドゥール・プランバナン遺跡群について

ボロブドゥール仏教寺院は8世紀から9世紀前半にかけて建立されたと考えられている。紀元5、6世紀にインドからヒンズー教が、その後まもなく仏教が伝えられ、ジャワでは一大文明が繁栄する。特に中部ジャワに興ったシャイレンドラ王朝は宗教美術を開花させ、ボロブドゥール寺院（仏教）とロロジョングラン寺院（ヒンズー教、プランバナンにある）が有名である。ボロブドゥールとプランバナンの両遺跡群は活火山メラビ山の広大なすそ野にあり、ジャワ島で最も豊かな穀倉地帯に位置している。この地方は古くから「ジャワの庭」と呼ばれ、その美しさはジャワーといわれている。インドネシアの美しい自然は「赤道にかけられたエメラルドの宝石」と称されるが、その中でも美しいとされる「ジャワの庭」にこれらの遺跡群が残されているのである。



「無色界」からの眺め

これらの遺跡群は1046年の地震によりダメージを受け、その後ボロブドゥールは歴史の舞台から姿を消してしまうが、19世紀に再び発見される。シンガポールに赴任したラッフルズの努力が実って、イギリスが正式に発掘作業を開始したのである。ジャングルの中に埋もれた遺跡が姿を現した時から、世界の注目を浴ぶるようになるが、1950年代から60年代にかけて風雨などにより再びダメージを受ける。そのため1973年から10年間修復工事が行われ、1983年2月に完了。周辺は考古学公園として整えられたのである。両遺跡群はユネスコの世界遺産に登録されている。

ボロブドゥール寺院の構造は地下に1層、地上に9層、全体で10層からできている。地下の部分は「欲望

の界」で、人間のおどろおどろしさを表すレリーフ160点が彫られている。地上の下側5層は、周囲を壁に囲まれた回廊になっていて「色界」と呼ばれる。その上の3層は「無色界」と呼ばれる円壇のテラスである。この界の3層には下から順に32、24、16と、合計72のストゥーパが規則的に並んでいる。ストゥーパの中にはそれぞれ仏像が鎮座しているのが見える。最上層には基部の直径16メートル、地上からの類型高35メートルという大きなストゥーパが、天に向けて突き上げている。

一方、プランバナンは、中央にシバ堂、向かって右側にビシュヌ堂、左側にプラフマ堂と三大聖堂が並ぶ。このプランバナン寺院は世界のヒンズー教寺院の中でも有数のものの一つといわれている。ボロブドゥールより1世紀ほど後に造られたと考えられている。三大聖堂の前には小ぶりな堂が3つ並んでいる。これらの堂には、それぞれの神の守護神が祭られている。つまり、シバ神にはナンディ（牛）、ビシュヌ神にはガルーダ（鷲）、プラフマ神にはスワン（白鳥）が守護神としてついており、それぞれ大きい堂（神）と小さい堂（守護神）が一对になっており、それが3つあるから三大聖堂という。プランバナンの周辺には240もの小さな寺院が点在している。その中のブラオサン寺院とサリ寺院は、プランバナン寺院をはさんでちょうど向かい合う形になっている。こういったことから、プランバナン一帯はかつて一つの大きな寺院だと考えられる根拠になっている。

### (3) JICAの公園化事業について

日本のODAが行う開発援助事業は、主として経済開発を中心に行われているが、文化政策として行われた事業が過去に2つある。一つはタイの文化センターにかかるもので、もう一つがインドネシアのボロブドゥールに関する事業である。これについては、異文化交流論の授業でJICA九州国際センターから客員講師が来られて講演された時に少しお話を伺い、またJICAが編集した「中部ジャワ地方ボロブドゥール・プランバナン国立史跡公園開発整備事業計画」（最終報告書）を参考に、どのような事業が展開されたのかについて調べた。

事業は1973年に始まり、その目的は人類共通の文化遺産の恒久的保存と、国民の統一的シンボルの形成のために、国立史跡公園を建設することであった。このため、スタディー・チームが結成され（日本側のメンバー14名、インドネシア側のメンバー13名）、3段階にわたる調査が行われた。第1段階では中部ジャ

ワ地方及びジョグジャカルタ地域の観光開発のマクロフレームを立案、第2段階では具体的な国立史跡公園開発整備計画と、公園化に伴う周辺地域の集落整備計画が立てられた。第3段階では計画案の見直しと考古学調査が行われた。事業は20年間の長期開発計画と10年間の実施事業計画を含むもので、この地方の①歴史的風土を保全し、②史跡を取り巻く村づくりをおこない、③国民観光や修学旅行を振興し、④国際的な文化観光都市を形成するという4つの具体的な方向性をもつていたのである。

事業の成果については、賛否両論ある。例えば、住民の移転については補償に問題があり、地域の伝統的生活が破壊されたという側と、補償は十分になされており、地元に新しい経済的効果をもたらしたとする側とがある。また、伝統的文化や芸術が観光客のものだけになってしまったとする説と、観光客用と地元の人用と別々にあってかまわないのでとする説がある。観光客については、1979年の時点で約15年先を見通して、1993年に1日平均1万人、年間2百万人の訪問者が予想され、観光の積極的プロモーションが必要とされた。これについては、現在のホテルの数、またボロブドゥールへのパッケージ・ツアーの多さを見れば、かなり達成されたのではないかと思われる。

#### (4) 公園化事業の跡をみて

上記のように、1979年に発行された最終報告書は、10年後及び20年後の観光の振興について大きな期待を寄せている。当時、日本とインドネシアの共同チームを構成した研究員の方々は第一線から引退しておられ、またインドネシアチームを構成したジョグジャカルタのガジャマダ大学は、私たちの訪問当時、インドネシアの学生運動の拠点となっており、外部からの立ち入りが制限されていて接触することは難しかった。そこで、最終報告書が描いた公園化計画と観光振興の「夢」の跡を、自分の目で確かめ、図面上の計画と実際のものとの相違について考えてみることとした。

##### ① 歴史的風土の保全

まず、ボロブドゥールとプランバナンの公園化事業の大まかな予算は、遺跡群のまわりに点在する住宅や農地を買収して村を移転させることと、無秩序な開発を制御し、環境整備を行って、新しい村づくりを行うことに費やされている。確かに、こうして整備された公園は、そこだけは雑多な人間の暮らしが営まれるまわりの集落からは隔離されながらも、全体的なジャワの自然風景の中にとけ込むように設計

されている。ここを訪れる人々は、ゲートをくぐった途端に8世紀のいにしえにもどったような、そんな錯覚さえ覚える。ボロブドゥールとプランバナンを整備することによって、「国際的文化都市」を形成しようと試みたこの事業計画は、ジョグジャカルタの人々によって引き継がれている様々な芸能、芸術、風習などとあいまって、インドネシアの文化的拠点にふさわしい名を、ここ20年にわたって世に広めてきたといえよう。

##### ② 史跡の形態

他の文化遺産と比較して残念に思うのは、最終報告書では考古学的な価値が重視されながらも、それらを展示・説明する博物館あるいは資料館の内容に乏しいことである。ボロブドゥールを映像で説明する映画館は数ヵ国語であったが、もっと詳しい説明が随所に設置されるべきだと思う。考古学的な出土品、遺跡の構造、修理や修復のプロセスなど、もっと写真や図で解説されたものが設置され、外国語でも紹介されていると良い。また、オフィシャル・ガイドが配備されていることを期待したのだが、皆無に近かった。これでは、最終報告書で目指されていた「社会観光（Social Tourism）」「文化観光」「教育観光」の振興をなしたとはいえないのではないだろうか。今後も発展の余地があるとすれば、それは「学ぶ観光」への移行だと思われる。

##### ③ 観光客

修復以前は観光客のほとんどがオランダ人だったそうであるが、公園化事業が終了した現在ではヨーロッパ、アメリカ、日本など様々な地域からの観光客がある。修復以前は年間約1万人だった観光客が、1973年からの修復作業により、1983年以降は10万人にまで増えた。また国内の修学旅行生も歴史の勉強も兼ねて多く訪れているようである。日本人観光客は1985年頃から増え出したようだ。特に、日本人観光客に人気のあるバリ島とのパッケージツアーが登場してからは、バリ島からの日帰り、あるいは一泊旅行のオプショナルツアーとして人気が高いようである。日本からバリへの観光客数を考えると、ジョグジャカルタを訪れる日本人観光客は相当数にのぼると考えられる。これは、日本人観光客へのサービス慣れをしたホテルの状況からも推測される。私たちが訪れた時期は、アジア全体の、また特にインドネシアの経済危機ということもあって、観光客の数は大幅に減っていたが、それでも、バリ島とのコンビで売り出しているツアーのお陰か、日本人観光客の姿

は多いようであった。

#### ④ 入場料

外国人は5000ルピア、インドネシア人は2000ルピアである。(当時1000ルピアは約15円なので外国人は75円、インドネシア人は30円ほどである)。地元のスーパーでジュース1缶が1000ルピアだったので、この金額は地元の人々にとってはそれほど高額ではないと思われる。入口は、外国人用とインドネシア人用と分かれている。外国人用のゲートから入場する人は比較的少なかったが、インドネシア人用のゲートでは入場券を買う人の行列が出来ていた。そこには、家族がピクニックがてら来ているような気軽な雰囲気があった。また、地方から団体で来ているインドネシア人、修学旅行の団体の学生なども多く、国民観光や修学旅行の振興を目的の一つにした公園化事業の効果があったことがわかった。

#### ⑤ 従業員、労働者

ボロブドゥール内で働いている人は約500人いるということであった。これらの人々は事務員やガーデナー、ガイドとして働いている。公園内は手入れが行き届いており、木や花の世話、ゴミの処理などに人手がかけられていることが想像できた。また、ボロブドゥールが修復される以前は、この周辺は水田ばかりでほとんどの人が農民であったが、1983年の修復完了以降は、みやげ物屋を開いたり、農業の合間にサイドビジネスとしてみやげ物を売り歩く人々が増えたそうである。みやげ物屋を開くには政府の許可が必要であるため、店を開けない人は手にみやげ物を持って観光客に近寄る方法をとる。売るための

みやげ物を作る産業も伸び、さまざまなデザインのTシャツや、バティックのカード類、木工製品など、色々な品物が売られている。観光化による副収入は増えたと思われるが、それによる過度の競争が、人々の間に貧富の差を招く原因にもなっていると思われる。

#### (5) おわりに

ボロブドゥールとプランバナンは、本当にすばらしい遺跡だった。そして、見れば見るほど不思議な遺跡だった。誰が、何のために造ったのか。その人達はどこへ行ったのか。そして、なぜあんなに巨大な遺跡が長い間忘れられていたのか。仏教寺院とヒンズー教寺院が非常に近距離にあることも不思議なことである。これらの疑問点の正確な答えは分からない。そのほとんどが謎につつまれているといつてもよいだろう。しかし、だからこそ世界中から観光客が訪れているのではないだろうか。

今回私は、日本が行ったボロブドゥールの公園化事業について賛否両論あることを知ったが、人類共通の財産ともいえるこれらの世界的な遺跡を守っていくのは、私たちの次世代への義務ではないかと思う。文化遺産の継承という点において、この事業を通して日本が世界に貢献できたことはすばらしいことではないだろうか。国際協力や開発援助の重要性が問われている今日、このような文化的事業の分野にもっと力が注がれるべきだと考える。NGOでは大小様々な文化的プロジェクトが展開されているが、ODAにおいても文化的な面に力を入れるべきではないかと思う。

#### 参考文献

- ・鷲見一夫 「ノー・モア ODA ばらまき援助」 JICC出版社 1992年
- ・村井吉敬 「検証 ニッポンのODA」 学陽書房 1992年
- ・渡辺利夫他 「日本のODAをどうするか」 日本放送出版協会 1991年
- ・鷲見一夫 「ODA 援助の現実」 岩波新書 1989年
- ・国際協力事業団 「中部ジャワ地方ボロブドゥール・プランバナン国立史跡公園開発整備事業計画（最終報告書）」 1979年

#### 4. 海外の日本語教育現場訪問

##### —シンガポール・ポリテクニックとダルマ・ブルサダ大学—

岩崎綾子

###### (1) はじめに

今回のゼミ旅行に参加する私の目的の一つは、海外の日本語教育の現場を訪問し、実際にどのような教育が行われているかや学習者の様子などを見て、その現状とこれからの課題について知ることであった。今回シンガポールでは、シンガポール・ポリテクニックの日本語コースを訪問し、日本人教師の方々へのインタビューと授業参観の機会を得ることができた。また、インドネシアのジャカルタでは、ダルマ・ブルサダ大学を訪問した際、日本語学科の学生達と交流する機会があったので、それについても触れたいと思う。

###### (2) シンガポール・ポリテクニック：日本語コース

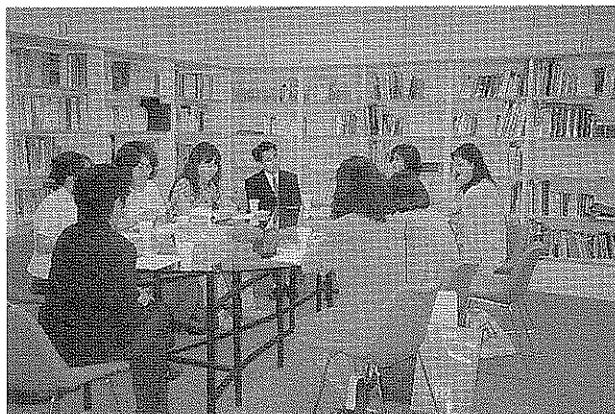
###### ① あわただしい訪問

3月8日にインドネシアを後にして再びシンガポールへ到着。そして、明くる日の9日、あわただしいスケジュールの中、午前中にクレアを訪問し、その後最終訪問地のシンガポール・ポリテクニックを目指すというスケジュールであった。本来ならば、シンガポール・ポリテクニックはフィールド・トリップの日程の最初の方で訪問する予定であったが、相手側の都合で（試験週間にあたっていたため）最後になってしまった。このため、シンガポール・ポリテクニック訪問後に空港に行き帰国便に乗るという、日程的には大変厳しいものになってしまった。

MRTに乗り込み、高層アパートや街並を眺めていると、立ち並ぶ校舎と「SINGAPORE POLYTECH-N1C」の文字が目に飛び込んできた。MRTを降り、近くのバスターミナルでバスを待っていると、シンガポールに来て以来初めての大嵐になる。午後のスコールだ。誰も傘を持っていないので、バスを一本やりすごして雨宿りをする。近くのセブン・イレブンに入って買い物をしている内に小降りになり、目的地に着く頃には雨は止んでいた。ポリテクニックの敷地は広く、日本語コースのあるLanguage & Communication Departmentがどこにあるのかわからない。あちこちで学生に聞いて、約束の時間までようやくたどりつく。ちょっと疲れ気味。

語学教材が並ぶ一室に案内され、そこでHeadのラッケル先生と、横井先生、白川先生、平田先生の3人の日本語教師陣とお会いした。日本語教師がすべてネイティブの日本人であることは、全く予想外の

ことで驚いた。お茶とお菓子をいただきながら、短時間でインタビューを行ない、5時半には授業が始まるため、慌ただしく部屋を出た。次に畳部屋（茶室）のある教室へ案内され、その後2つの普通教室を回ってそれぞれの先生の授業を見学した。茶室は立派なもので、企業の寄付によるものだそうだ。先週は試験週間ということで採点に忙しく、また訪問者も多く忙しい中で、私達のために時間をさいてくださった先生方と学生の皆さんに感謝したい。



日本語教師にインタビュー

###### ② シンガポール・ポリテクニックについて

シンガポールでは、中学校卒業程度のOレベルが修了すると、その次にポリテクニックへ行く学生が多い。シンガポールにおけるポリテクニックは、日本でいう高校でも大学でもないレベルの学校で、言うならば戦前の高専に似た学校である。ポリテクニックの方針は、卒業後すぐ社会に出て活動できる学生を育成することであり、たいていの学生は就職するが、なかには大学へ進学する学生もいる。学部は経営、応用化学、電気工学、土木建築、海洋学、機械工学などの実践系・技術系が多い。

###### ③ 日本語コースについて

1991年に政府の外国語推進政策の一環として、ドイツ語コース、フランス語コースと共に開講された。これらは選択科目として設置されたコースであり、様々な学部や学科からの学生が受講している。授業は週1回2時間で、1年に60時間、3年間で180時間受講し、コースが修了する。3年間の学習を終えた時点で、希望者はJLPT（日本語能力検定試験）の4級（初級レベル）を受ける。3年生は学習者各自の専門が忙しく、JLPTを必修にすると負担が大きくなるため、希望者のみとしている。教師側が試験に向

て準備を行なうためのハンドアウトを渡し、試験対策などをして学生をサポートするが、実際合格する確率は40%程度で、かなり難しいのが現状である。また、日本語を選択してもそれが即就職に有効になるという訳ではないため、学習者の動機に興味や関心以上の強いものが多く、学習の到達度も低いということであった。

#### ④ 学生と教師について

日本語コースを選択している学生の数は、1~3年全体で660人である。1クラスの中には様々な専門の学生があり、クラス分けは学生が都合のよい曜日と時間を選択して決まる。ほとんどはシンガポール出身の学生だが、たまにマレーシアやインドネシアからの留学生も受講している。1クラス28人から始めるが、途中でドロップアウトする学生もいる。教師陣はフルタイムの日本人教師3人と、パートタイムの日本人教師1人で、現地人教師はない。教師1人あたり、週に最高16時間のクラスをもつ。学生が日本語を勉強する動機は、日本文化に興味があるからというものが多い。また、何かに役に立つのではないかと期待している学生もいるが、実際には3年間で到達できるレベルでは、あまり役に立たないのが現実ということであった。これらのコースの内容は初級であり、コミュニケーションができるレベルまでを目的とはしていないので、教師側にもできることに限界があり、教師が期待するものと、専門に多忙な学生の反応との間にギャップがあるという難点がある。

#### ⑤ 教授内容について

教科書は『文化初級日本語Ⅰ』を使用。内容は機能中心シラバスとなっており、いろいろな場面でどんな表現がでてくるかわかるようになっている。1年で6課まで進み、2年では7~11課、3年では12~15課まで進む。時間が限られているため、残念ながら3年間で教科書一冊を終えることができないそうである。学生の負担が過重にならないように教師側は常に配慮し、宿題などはできる範囲で出す程度である。評価は年4回各学期末に行ない、筆記と口頭の両方の力をみる。また、教科書だけではなかなか理解が進まず、基本に弱いという学生のレベルをもとに、日本人教師が教科書の副読本を編集し、シンガポール・ポリテクニックで発行している。この副読本の編集には大変な労力がかかったが、学生には役立っているとのことであった。

#### ⑥ 文化面の理解について

日本国内の学習者とは違って、海外の学習者が日

本の文化に触れる機会は限られている。そこで、言葉以外に文化的な面をどのくらい教えられるのかについて質問を行なった。週2時間の授業でどこまで日本文化の理解が深まるのだろうか。教科書には挿し絵を使って文化面を解説する部分もあるが、残念ながら2時間の授業で特に文化についての講義にさく時間はなく、紹介程度しかできないということであった。しかし、対外的な面ではシンガポールにある日本人学校の学生との交換プログラムを行ったり、お茶の授業などを設けたりしている。授業の一部は茶室で行なわれ、ここには日本の雰囲気がある。これは「TATAMI ROOM」という教室で、畳敷きの部屋が付随した教室である。ちょうど私達が訪問した時、ある学生が茶道の会を催すビラを配っていた。こうした、日本文化に興味をもつ学生自らの活動もある。また、年に1回希望者を募り、広島、大阪、京都へ修学旅行を行なっており、毎年約20人の学生が参加している。従ってこれらを通して日本文化を知ることが可能ではないかと考えられる。

日本独特の非言語コミュニケーションなども重要な文化の一つである。例えばお辞儀など、日本人にとっては当たり前のことで、シンガポールにはその習慣はない。そこで、学生同士、あるいは教師と学生で実際に練習することも行なっている。日常でも日本人教師に会うとお辞儀をする学生もいるが、残念ながら長期休業もあって、やはり忘れてしまうことも多いという。

#### ⑦ シンガポール・ポリテクニックでの日本語教育の難しさ

日本国内で日本語を学ぶ場合は、どこへ行っても日本語に触れる機会があるが、シンガポールでは少ない。これは、日本で英語を学習する場合にもあてはまることがある。学生が多忙なこともあります、自己学習は期待できない。週2時間の授業のみが日本語に触れる唯一の時間であるのが現状で、どうしても学生が受け身になってしまふ。授業を復習から始めたりすることもあり、時間が足りないのが大きな問題である。とにかく週2時間という少ない時間数の中で、何をどのくらい効率良く教えたよいか、また学生の日本語学習の動機づけをどう行うかが困難な点であり、常に重要な課題となっている。これらのこととは、日本における英語（また、その他の外国語）学習にすべてあてはまる事項であり、外国語教授の原点にかえって問題の深刻さに改めて気づかされた。

⑧ これから日本語教師を目指す人へのメッセージ  
フルタイムの3人の日本語教師陣から、日本語を教えるために、また海外で教える際に必要なことについて伺った。3人の意見はまちまちであったが、まとめて言うと、まず日本語がどういう言語体系をもっているか、日本語の言語自体を知ることが大切であるということだった。次に言語面ばかりに焦点を当てないで、文化・社会・経済・政治などの日本全般についての知識を深く持つことも不可欠である。さらに、海外で教える際には、現地で話される言葉についても周知しておいたほうがよい。初めは、日本語のみを使って授業をする直接法でやろうとしたが、効果が上がらず、学生にも拒否反応が見られたため、現在は媒介語を用いているというスタッフの声があった。ここでの媒介語は主に英語であるが、シンガポール独特の英語であり、こうした学生の使っている言葉を使い、親近感を育てるこも重要である。実際の授業参観で、シンガポールの英語で学生達とコミュニケーションをしている3名の日本人スタッフを見て、言葉のやりとりの中でこのことを実感できる場面もあった。教授法については、直接法のみでなくいろいろなものについて学んでおいて、どんなところへ行ってもそれらをミックスして自分なりの教授法がつくれるようにすれば、非常に有効である。また、その国に対する知識や理解を深めておくと役に立つということであった。

#### ⑨ 授業参観

帰國便の関係で、参観時間は非常に限られており、また今回の授業は以前実施した試験の解答を中心であったため、普段の授業風景を充分に伺い知ることはできなかつたが、媒介語の使い方や学生の反応を見ることはできたと思う。1年生は否定形、指示語、疑問詞などを中心に出題されていた。教師はOHPを使って解答し、説明には英語を用いて詳しく説明していた。また時には、中国語の「的～」を引用して、所有「～の」の文法説明をするなどは、中華系の学生がほとんどであるシンガポールで教える際の一つの特徴だと言える。2年生は平仮名に加えて、片仮名の使用も増えており、片仮名表記、接続詞、動詞が中心に出題されていた。

参観して強く感じたのは、教師陣の苦労である。教授における困難な点について、「時間が足りない」ことを訴えていた。週2時間のクラスでしかも午後5時半からといった遅い時間帯に授業を行なうため、学生の疲れが大きく、集中力に乏しくなる。それら

をいかに乗り越えて学生を集中させ、授業を活性化させるかが、教師にとって常に重要な課題だと考えられる。主専攻でもなく、日本語を使う機会もほとんどない学生達に、やる気と目的意識を興させるのは簡単ではなく、そこに教師の力量がかかっており、実際に教えている教師陣の苦労と努力は並でないと実感した。

これに加え今回注目したのは、教師がテキストの解説書を発行したことである。実際に教えている学生のレベルからテキストのみでは不十分と考え、試行錯誤の末に、出版社協力も得て4年の歳月を経て完成したという。テキストに紹介された文法構造と単語を、英語でより理解しやすく解説しており、忙しい学生でも自己学習をするのに役立つようになっている。また、学外その他の英語話者の日本語学習者にも適しており、より広く活用できる解説書になっている。学習者のための、こうした教師のたゆまぬ努力が、日本語教育を支えているのだと実感した。

### (3) ダルマ・プルサダ大学：日本語学科

#### ① こじんまりとした大学

ジャカルタの中心地にあるJICAインドネシア事務所を訪問後、選挙前で情勢が不安定なため、私達の身を心配するJICA調整員の固山さんの案内で、次の目的地ダルマ・プルサダ大学をめざしてミニ・バスで移動。ジャカルタの交通状況は悪く、中心部は渋滞。そうでない時は、前に車があると追いぬかなければ気がすまないかのような運転になる。ひやひやしながら郊外へ出ると、「この辺りが今一番危険ですね」と固山さん。小さな家や店がひしめきあっている道の脇には子供達が遊んでおり、大人達はただ座っているように見える。学校や仕事はないのかと不思議に思ったが、大統領選挙を一週間後に控え、人々が集会を開くのを防ぐために、職場や学校などが急遽休みになっているとのことだった。もちろんこれから訪問する大学も休業中である。車が停止すると、新聞を売る子供達が集まってきた。ジャカルタに来て以来いつも感じる社会不安と経済格差が、ここでも感じられた。

家並みがとぎれると、並木道の向こうに大学が見えてきた。白い壁と赤茶色の屋根の校舎で、規模は私達の通う県立大とほぼ同じように見えた。校内は、今までの街の様子が嘘のように静かで落ちついた雰囲気である。協力隊員の小池さんと日本語学科の学生が私達を出迎えてくれた。大学は政府の方針で臨

時休業となつたが、私たちの訪問を心配した副学長が、特別に学生を呼び寄せててくれたということであった。一室に入つてしまふと、国際部長による歓迎の挨拶が始まった。国際部長は女性。インドネシア語の挨拶を、小池さんが日本語に通訳してくれる。次に、日本語学科の学生が日本語で自己紹介をしてくれた。私たちの自己紹介より、あちらの学生の日本語の方が丁寧で分かり易かったのがおかしかった。おそらく、彼女たちの日本語は基本に忠実で、一方私たちのは若者言葉だからなのだろう。

次に校内の図書館やオーディオルームを見学した。移動時に学生たちが気さくに話しかけてきて、学校生活やインドネシア語の挨拶なども教えてくれた。驚いたのは、ほとんどの学生が名刺を持っており、しかもプリクラを貼ったものをくれたことだ。また、昼食には「HOKA HOKA BENTO」と書いてあるお弁当が出され、思わずところで日本の文化に出会つた。食事中に話をするに慣れていない日本の学生は沈黙してしまいがちだが、積極的な日本語学科の学生に助けられ、楽しい交流会となつた。コミュニケーションの媒体は日本語なのに、日本人の私たちよりも、インドネシアの学生の方が積極的に話題も豊か、しかも表現力もあるというのは問題である。日頃からコミュニケーション力を磨き、新しく出会つた人とスムースなつきあいができる力を伸ばしておく必要性を感じる。



日本語学科の学生と交流

## ② 施設概要

ダルマ・プルサダ大学は、1986年、日本に長期留学経験のある教師陣によって設立された。文学部・航海学部・工学部・経済学部を備えた独自に卒業認定が行なえる総合大学で、3年卒業課程と5年卒業課程がある。9月から6月までの2学期制をとつておらず、日本政府や民間企業等の支援を受け、多くの留学生を日本に送つてゐる。学生総数は1,744名。教員

数124名、職員数106名で成つてゐる(1997.5現在)。日本の大学との間でスタッフや学生の交流・交換も行われてゐる。天皇陛下・皇后陛下が大学を訪問されたことを非常に誇りにし、大学案内に写真を掲載している。

## ③ 日本語教育施設について

文学部には英語学科、中国語学科と並んで日本語学科があるが、その母体となつたのは日本文化学院である。これはジャカルタでは最も古い日本語教育機関で、日本からインドネシアへ帰国した元留学生の同窓会「プルサダ」の有志によって、1957年に設立され、ダルマ・プルサダ大学設立に伴い、その付属機関として結合された。ジャカルタの一般成人を対象に広く門戸を開放しており、入門から基礎レベルの日本語の普及に努めている。非常勤の現地人日本語教師によって運営されていたが、ネイティブスピーカーの必要性から1990年から1992年の2年間、青年海外協力隊の日本語教師隊員が派遣された。初級・中級の日本語教育に携わり、教材開発やクラス編成にも力を入れたが、現在は現地のインドネシア人教師が独自で運営している。また、大学図書館には、日本やジャカルタに滞在、在住している日本人から様々な日本語書籍の寄贈があり、総数は約3,000冊近くにのぼる。種類は夏目漱石などの小説から技術専門書、絵本、ファッション雑誌などである。これらを活用して卒業論文を日本語で書く学生もいる。また学内には、日本企業から寄贈されたLL教室も設置されている。これらの図書を整理するために、青年海外協力隊の司書隊員の要請があり、現在小池隊員が派遣されているが、館内の整理はほぼ終了し、帰国の時期も近い。

## ④ 文学部日本語学科の学生との交流

日本語学科の学生数は約300人で、休業中にもかかわらず、5人の在学生と卒業生2人が私たちのために集まつてくれた。当日交流に参加してくれた学生は、日本の石川県で2週間ホームステイを経験したメンバーである。大学では午前8時から午後4時まで4、5コマの授業があり、日本の歴史、文化、文学、言語などを勉強している。ある学生は授業で川端康成を讀んでいたとのことだった。日本語学科を選んだ動機は、文化的興味や、高校でドイツ語、フランス語、日本語の選択科目で日本語を学んだことから、続けて勉強したいと思ったなどである。現在ネイティブの日本人教師がいないにもかかわらず、学生達の発話レベルは高く、積極的に日本語で話しかけてく

れた。卒業生の一人は、現在インドネシア人に日本語を教えており、もう一人は日本人にインドネシア語を教えている。在学生のなかでも、卒業後は日本語を教えたい、日本語を活かした仕事がしたいという学生もいて、日本語を学ぶ積極的な意志が伝わってきた。

図書館に所蔵された卒業論文を見たが、日本文化について書かれたもので、限られた参考資料をもとに学生たちの努力の跡がみられた。教師陣は、日本政府や日本企業の支援を受け、日本へ研修、あるいは大学視察に出る者もいるとのことであった。日本と諸外国の文化のかけ橋となる人々が、インドネシアのジャカルタ郊外の小さな大学にたくさんいることを知り、驚くと同時にその熱意に心をうたれた。また、これから益々お互いの結びつきが深くなる可能性も感じ、自分も日本人としてできることは何かについて考え、共に協力しあうための努力が必要であると感じた。

#### (4) おわりに

日本語国際センター（1993）の調べによると、海外の日本語学習者数は約162万人で、教育機関は99カ国・地域でおよそ6,800機関に至っている。今回訪問したシンガポール、インドネシアなどを含む東南アジ

アは、東アジアや北欧に並んで日本語教育機関数が多い地域である。日本語学習者数は全体的に一時のピークを過ぎてやや減少ぎみであるが、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドなどでは、政府の外国语教育政策などにより、アジアの言語の1つとして第二外国语の選択肢に導入されている。

今回、海外の2つの国での日本語教育の現場を訪問する機会を得て、多様な教育形態を知る上でよかったと思う。学校のシステムの違い、学習者の背景や母語の影響などに伴い、様々な日本語教育のあり方がある。今回は学校機関のみの訪問だったが、旅行先で出会った観光ガイドの方々はそれぞれの職場で勉強したそうである。このように、学習動機や必要とされる日本語のニーズは多様化しており、教育現場や教育内容も多様化しているのが現状である。これに伴って、これから日本語教育に求められるのは、多様な現状に対応できる柔軟性であると考えられる。そのため、多様なニーズに則した教授法、教科書、教材などの研究開発などが必要である。また、日本語教師に求められるものは、柔軟な対応能力と日本についての深い知識であろう。さらに海外の現場では、異文化を背景を持つ人とのコミュニケーションが円滑にでき、日本の文化にかたよらず、学習者の文化も同じように尊重できる姿勢が必要であると考えられる。

#### 参考文献

- ・ Darma Persada University パンフレット
- ・ 「日本語の習得と文化理解」 異文化間教育学会発行 1997年
- ・ Singapore Polytechnic, Language & Communication Department, 'Japanese Language Grammer & Vocabulary Notes for Beginners'. (文法・語彙解説書) 1996年
- ・ 倉地暁美 「異文化間教育学と日本語、日本事情の接点を求めて」『異文化間教育10』 アカデミア出版会 1996年
- ・ 久保田真由美 「コミュニケーションとしてのあいづち」『異文化間教育8』 アカデミア出版会 1994年
- ・ 「海外の日本語教育の現状 — 日本語教育機関調査1993 —」 日本語国際センター
- ・ 石田敏子 「異文化理解における日本語教育の課題」『異文化間教育4』 アカデミア出版会 1990年

## 5. 財団法人自治体国際化協会 (CLAIR : Council of Local Authorities for International Relations)

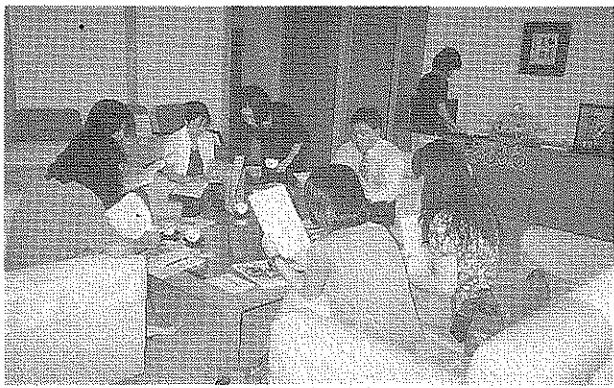
石原理恵子

### (1) はじめに

シンガポールで迎える最後の朝、ホテル(YMCA)で朝食を取った後、旅の荷物とお土産と、そして思い出のたくさん詰まったスーツケースの奥からそっと書類を引きだした。このゼミ旅行で私の担当する研究課題の資料と、事前に調査しておいたレポートなどがそれである。心の準備と気合いを入れ直して、ホテルの一室に全員集まりミーティングを行う。3月9日最終日、いよいよ私の担当する「自治体国際化協会(CLAIR)」のシンガポール事務所を訪れる時が来た。

ホテルを出ると、みんな足早にMRT(地下鉄)の駅に向かって歩いていく。初日、行き方を間違えて3分もかかる道のりを7、8分かけて大回りしたことが今となっては懐かしい。もう、ここでの慣れた道を歩く姿は観光客とは違うような気がする。一人ひとりが「調査員」になったような気分! 山口では見られないこの便利な乗物MRTの乗り方も、専用カードの使い方もほぼマスターできたのに、今日でこれともお別れかと思うと少し寂しい。

高層ビルの立ち並ぶオフィス街の中から目的地を探すのには、いつも苦労する。常に余裕を持って出発していたので、この度も遅れることなくたどり着くことはできたのだが、片手に地図を持ち、全員の目と頭が頭上や左右に向けられる姿は、初日と変わらず新鮮だった。30分かけてようやく到着した「CLAIR」の事務所は、高層ビル(香港銀行ビル)の12階に立派なオフィスを構えている、ドアを開けると約10人位の職員が綺麗に並べられた机に向かって仕事をされていた。ふと、シンガポールから日本に戻ってきたかのような錯覚を感じるくらい、この事務所の中は日本のであった。通していただいた会議室で、私たちは中村司朗さん(山口県庁職員・シンガポール事務所補佐)にインタビューする機会を得た。



ちょっと緊張ぎみ!

事前に入手した資料とインターネットの情報をもとに、大よその活動内容は理解できていたが、実際に事務所を訪問し、中村さんから詳しい説明と現場の声を聞かせていただいた結果、活字では読み取ることのできなかった現場の雰囲気というものを感じ取ることができた。CLAIRに関する情報・活動内容等は、中村さんに頂いた資料(97年度版)を参考に、以下に示す。

四面のうちの二面がガラス張りの窓で囲まれた会議室からは、1等地マリーナ・ベイのビル群が見える。その景色は、次の日に帰国しなければならない私達の胸にジーンと焼き付くほどの美しい眺めだった。眼下では埋め立て工事が急ピッチで進められている。「みなさんが次に来られる時は、この辺りの景色もすっかり変わっていると思いますよ」と、中村さんは言われた。開発に開発を進めるシンガポール。この海の向こうに、それに追いつこうとするマレーシア(ボルネオ島)やインドネシアの島々があり、数日前に私たちが見てきたような人々の暮らしがあるのが嘘のような感じさえする。一番の印象としては、こんな恵まれた環境の中で仕事をされている中村さんがとても羨ましく感じられたことである。できればこんな職場で私も働けたらなと思った。ただ、シンガポールのセキュリティー・システムはしっかりしており、例えば、トイレは部外者が使用できないようにいつも鍵がかけられ、関係者が使用する度に、自分で鍵を開けるという方法が取られていた。そんな所に、安全は買うものという厳しい現実のあることも感じられた。

### (2) 財団法人自治体国際化協会(CLAIR)とは

財団法人自治体国際化協会(CLAIR : Council of Local Authorities for International Relations)は、地域における国際化の気運の高まりを受け、こうした動きを支援し推進するための地方公共団体の共同組織として、昭和63年7月に設立された。

CLAIRは東京を本部として、ニューヨーク、ロンドン(平成元年)、パリ、シンガポール(平成2年)、ソウル(平成5年)、シドニー(平成6年)及び北京(平成9年)の7つの世界の主要都市に海外事務所を設置するなど、海外ネットワークの充実に努めている。

このようなネットワークを活用して、CLAIRは地方公共団体の海外における活動を支援し、地域の国際化、外国における地域活性化の方策等についての情報の収集・提供や調査研究を行う一方、対日理解促進を積極

的に図るため、わが国の地方自治制度や地方行財政制度を中心とした諸事情を海外に紹介している。

また、CLAIRは、語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）の推進、地域の国際化の担い手となる人材の育成、地域の国際化協会への支援などの業務を行っているほか、自治体国際協力センター（Local Authorities Center for International Co-operation : LACIC）を協会内に設置し、地方公共団体の姉妹交流をはじめとする国際交流や国際協力活動の支援に努めるなど、深化・多様化する地方公共団体の国際化施策の支援にあたっている。

### （3）海外事務所の展開・活動

現在、7つの事務所では以下の地域を担当し、活動を展開している。

- ・ニューヨーク事務所：アメリカ合衆国（東海岸地域）、カナダ
- ・ロンドン事務所：連合王国、アイルランド、ドイツ、オーストリア、オランダ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド
- ・パリ事務所：フランス、ベルギー、ルクセンブルク、スイス、イタリア、スペイン、ポルトガル
- ・シンガポール事務所：シンガポール、マレーシア、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、タイ、ベトナム
- ・ソウル事務所：大韓民国
- ・シドニー事務所：オーストラリア、ニュージーランド
- ・北京事務所：中華人民共和国

主な支援活動としては、地方公共団体関係者が海外で行う調査、視察等の活動に対し、海外事務所が中心となって訪問先の紹介、アポイントメントの取付け、事務所内での概要説明、資料提供等の活動支援を行っている。そのための連絡・調整は自治体国際協力センター（交流親善課）で行っている。

活動支援を依頼する場合は、原則として出発日の60日前までに、「海外活動支援依頼申込書」を当協会支部（都道府県、政令指定都市）へ提出しなければならない。

### （4）国際交流・協力事業の推進：自治体国際協力センター

近年、国の枠を越えた相互依存関係の深まりと、環境問題等の地球的規模の共通課題の深刻化に伴い、地方公共団体が地域レベルで国際化や国際交流、さらには国際協力に果たす役割の重要性が世界的に認識されるようになってきた。

日本の地方公共団体は積極的に国際交流に取り組み、例えば姉妹（友好）提携数は、現在1,200件を突破し、それぞれの団体の創意と工夫に基づいた様々な交流が行われてきている現状にある。一方で、近年の地方公共団体の国際交流は、国際的な友好親善を中心とするものから、海外からの研修生受け入れ、専門家派遣等を通じて相手地域の人づくりや技術ノウハウの向上を図ろうとする国際協力活動へと深化してきている。

地方公共団体の国際協力に対しては、地域の特性を生かした多様な協力、対等なパートナーシップに基づく住民参加型の協力、そして相手地域のニーズにあつたきめ細やかな協力が期待されている。こうした中で、CLAIRでは、地方公共団体の国際交流・協力活動をさらに積極的に支援するため、平成7年度より自治体国際協力センターを設置し、各種事業を実施している。

センターの主な業務は、次の通り。

- ・地方公共団体の海外における国際化推進のための活動支援に関すること。
- ・地方公共団体を主体とした国際交流事業（姉妹交流事業を含む）の支援に関すること。
- ・地方公共団体を主体とした国際協力事業の支援に関すること。

### （5）JETプログラムの実施

CLAIRでは、自治省、文部省及び外務省の協力のもと、地方公共団体が主体となって行う「語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching プログラム）」を実施している。

この事業は、英語圏7カ国（オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、アイルランド、南アフリカ共和国）並びにフランス、ドイツ、中国、韓国、ロシア、ブラジル、ペルー、ポルトガル、スペイン、イスラエル、イタリア、メキシコ、ベルギー、フィンランド、チェコ、モンゴル、ウクライナ及びアルゼンチンを加えた25カ国から青年を招致し、地方公共団体の国際交流担当部局や中・高等学校において国際交流事業や語学指導に従事させることにより、地域レベルでの国際化と語学教育の充実を図ることを目的としている。また、平成6年度からは、スポーツを通じた国際交流に従事するスポーツ国際交流員も招致している。

JETプログラムを円滑に実施するため、関係三省、地方公共団体及びCLAIRでは、役割分担を定めている。CLAIRは、三省との連絡調整、外国青年の受入団体への斡旋や配置、受入団体への助言や指導、外国青年

に対するオリエンテーションや研修、カウンセリング、及び広報活動等を担当している。

#### (6) 人材育成

CLAIRでは、国際化に対応できる人材の育成を図るために、地方公共団体職員の本部勤務並びに海外事務所への派遣の実施により、国際交流の実務経験と海外における勤務、また生活を体験する機会を提供している。また、地方公共団体の多様な職員海外研修の需要に応じるため、国際化に関する各種研修等の斡旋・紹介等のほか、国際交流短期研修の実施、地方公務員海外派遣プログラム等への協力などを行っている。その一つに、CLAIR国際塾がある。

国際交流短期研修（愛称は「CLAIR国際塾」）は、地域の国際化に対応できる人材育成に資するため、海外事務所を活用した地方公務員向けの短期海外研修プログラムとして、平成2年度からスタートした。CLAIR国際塾では、地方公共団体職員等を対象に3ヶ月程度の海外派遣研修を実施し、語学研修とあわせて外国地方団体の実情を身をもって体験する機会を提供することを目的としている。このため、渡航先国の地方制度に関する充実した数多くの講義・視察を含むのはもちろんのこと、本プログラムのハイライトとして、外国地方公共団体等に単独で滞在し、実際の業務等を体験する実地研修を実施している。

派遣対象者は、

- ・原則として年齢20歳代後半から30歳代であること
- ・将来地域の国際化施策をリードできる人物であること
- ・地方行財政に関する基礎的な知識及び経験を有していること
- ・生活環境の異なる外国における研修及び生活に対して十分な適応性を有すること
- ・相当程度の語学力を有すること

の5つの条件を満たす、地域レベルの国際化推進の中核となる地方公共団体職員又は地域国際化協会職員となっている。

その他、CLAIRの主な事業としては、

- ・情報の収集及び提供
  - ・地域の国際化施策に対する支援
  - ・地域の国際化関係団体のネットワークの強化
- 等がある。

以上が、「財団法人自治体国際化協会（CLAIR）」の概要である。インターネットにホームページが開設されているので、詳しい情報収集も可能となっている。

（ホームページアドレス

<http://www.Clair.nippon-net.ne.jp>）

私は、CLAIRのこれから動きに注目し続けていきたいと思っている。

#### (7) インタビュー

今回インタビューに答えていただいた中村さんは、山口県から出向しているが、山口県だけの仕事をしている訳ではない。CLAIRシンガポール事務所で働く十数名で、日本のすべての都道府県から依頼される用件をこなしていかなければならないのである。もちろん、山口県からの依頼もあるが、他県に比べればまだまだ件数としては少ないようである。

では、中村さんの活動は、山口県の国際化にどうつながっていくのだろうか。間接的には、例えば、他県の活動を支援する中で、新しい領域での国際交流や国際協力の可能性を見出し、山口県と東南アジアとの関係に応用する視点を見出すことができるのではないだろうか。山口県が国際化を進めていくためには、地方公共団体の在り方そのものも国際化していく必要性があるであろう。山口県からCLAIRへの出向は、山口県では中村さんが2人目だそうである。今後、このような形で海外で働く公務員が増え、またCLAIR国際塾などで学ぶ公務員が増えることは、山口県（自治体）の国際化にとって大切だと思う。

以下、質問の様子を少し紹介したい。

Q：クレア（シンガポール事務所）では、これまでにどのような方が、どのような目的で支援要請をされてきたのか。

A：主に都道府県や市町村の方が、調査研究や情報収集・提供を目的とした要請をされてきている。例えば、環境や教育（シンガポール大学との交流）、または、労働省に関わる研修を目的とした要請などもある。

Q：地方公共団体の関係者以外の人がクレアを利用することは不可能か。

A：原則として、地方自治体に関わる人のみが利用できる協会なので、例えば学生が個人の学習や旅行等を目的として利用することや、明らかに企業目的などである場合は不可能。しかし、公共の目的にかかると判断される場合は、利用することも可能である。

Q：現地職員（シンガポール事務所では現在3名）の採用方法とその方々の仕事内容は。

A：就職斡旋会社に依頼したり、新聞等で募集して応募者を募り、各事務所ごとに面接等の試験を行なって採用するという形を取っている。現在3名いる現地職員の仕事内容は2つに別れている。一つは情報収集・入手、関係機関等の連絡・調整を行なう調査員の仕事。もう一つは、一般的な業務を行なう秘書。

Q：なぜ、シンガポールを選んだのか。

A：自分で選んだわけではない。指名されて、シンガポールで働くことになった。滞在予定期間は、平成9年から11年までの3年間で、日本にいる時は山口県文化振興課に在籍していた。帰国後は国際課で働くことになると思う。

Q：仕事をするにあたって、初めの頃大変だったことは。

A：異文化交流で一番最初にぶつかる言語の壁に苦労した。シンガポールの英語は特殊な発音をするため、例えば銀行や電話会社とのやりとりで聞き取れないこともあった。次に、通信事情において、日本のようにスムーズに連絡事項や書類のやりとりが進まず、困った。これは、機械の相性の問題にあるとも考えられるが、土地柄や人柄の問題もある。つまり、ビジネス・コミュニケーションの方法やスタイルの相違など。

Q：生活をするにあたって、初めの頃苦労したことは。

A：シンガポールは日本人を受け入れる環境が大変整っていて、親しみやすいため、特に苦労したことはない。困るといえば、一人暮らしなので暇な時間がたっぷりあること。働くスタイルが違うので、日本のように残業をすることは少ないから。女性の職員は、現地の職員とすぐに仲良くなって、一緒にショッピングに行ったり、旅行の情報を得たりと、生活をエンジョイしているようだが、男性職員は現地

でちょっと飲みに行くという仲間もできにくい。そんな時は、早く日本の生活に戻りたいと思うこともある。

Q：今後の目標は。

A：東南アジアで得た経験を、今後の国際化事業に活かしたい。

#### (8) インタビューを終えて

ゼミ旅行の2カ月位前にCLAIRの存在を知り、企業研究を進めたり、イメージを膨らませてみたりしたが、想像以上に多岐にわたる事業展開が行われ、しっかりとした土台のもとでの組織力で国際化協会が築かれているのに驚いた。やはり、日本の自治体の組織力は徹底していると思った。事業内容は一見すると素晴らしいものとなっているが、設立から10年を経た今、専門家を含めて事業成果の細かな評価・反省を行い、次のステップに向かうことの大切なのではないかと感じた。

学生のインタビューであるにもかかわらず、質問に一つ一つ丁寧に応え、説明して下さったことに感謝したい。シンガポール事務所を訪ねて、海外で働くことへの魅力が深まった。今回勉強になったことは、ただCLAIRについて知識を深められただけでは決してない。テープを取りながら、自分が輪の中心になってインタビューする難しさや、日頃使い慣れない敬語を使うことの大変さ、公務員という職にある人から答えを引き出す難しさ等をひしひしと実感した。準備をしていたつもりの録音用テープが足りなくなったり、質問する際つっこんだことが聞けなかったり、間を持たすことができなかったりと、反省点も数多くある。これらの経験を、今後の私に大いに役立てていきたいと思っている。

素晴らしい体験ができたこのゼミ旅行と、そして約1時間にわたったインタビューに快く応じて下さった中村司郎さんに心から感謝致します。ありがとうございました。

#### 参考文献

- ・財団法人自治体国際化協会 'Council of Local Authorities for International Relations' パンフレット
- ・山口県 「やまぐち国際化推進ビジョン：世界と手をつなぎ世界と共に生きるやまぐち」 1997年
- ・自治体国際化協会、自治体国際協力センター 「姉妹自治体の活動状況」 1997年

## II. 異文化ミニ体験記

演習で使用したテキスト「観光人類学」(山下晋司、1996年)には、「人類学者が来たぞ！」と叫んで、テレビやビデオなどのハイテク機器を急いで隠し、期待される「未開人像」を演じようとするアフリカの人々を描いたGray Larson (1984) のコラム風刺画が載っていた。西洋から未開社会に入るこのような研究者像はみられなくなった今日においても、いまだに観光という領域の中で同様の事例を見る能够ののではないか、とテキストは投げかけていた。

非日常的なもの、伝統的・民族的なもの、楽園・ユートピア、本物の何かを求めて、観光客は世界を飛び回っている。ありきたりのパッケージ・ツアーでは見られない現地の人々の生活を体験するために、個人旅行やスタディー・ツアーなどに出かける例も急増している。旅を題材にしたテレビ番組や書籍の類も多種多様にある。このような観光客が求める旅のオーセンティシティ(authenticity : 本物性)、あるいは、私たちが旅先

で出会うことを期待する純粋で本物の文化とはいっていい何なのか？地球社会のボーダレス化や文化のグローバル化が進んだ今日、各文化圏で本物なるものを見出そうとすると、どうしても伝統文化に直結して考えられがちになる。しかし、現在どの文化圏の人々も、それぞれの「現代文化」の中に生きているとすれば、そういった伝統的で純粋なるものとは断片的なものであり、そこに焦点を当てようとするのは木を見て森を見ないといったことにならないだろうか。

こういった疑問を出発点にし、観光を生み出すしあげや、観光が社会に与える影響、観光によってつくり出される文化という視点から、テキストを読み進んだ。このフィールド・ワークでは、「観光客となった自分たちの意識や行為を、できるだけ客観的に眺めてみよう」としたのだが、観光地に着いた途端に、私たちはしっかりと観光客を演じていたのだった！

### 1. シンガポール見て歩記<sup>みあるき</sup>

#### (1) 美しい街 シンガポール

今回の私たちのゼミ旅行は、シンガポールから始まった。メンバーのほとんどはシンガポールが二度目であり、また治安も良いため、安心して観光ができた。私はシンガポールは初めてだったので、なにもかもが新鮮で驚きの連続であった。まず驚いたことは、やはり街がきれいなこと。「ガーデン都市」で称されるように、シンガポールが一見して美しい街であることは有名だが、きちんと整備された道路、その脇には豊富な緑と花、そして計画的で近代的なビル群。私の驚きは、次第にうらやましさに変わっていた。日本と比較し、この差が人々の心のゆとりに表れてくるのではないかとも思った。到着した日は、日曜日の午後であった。空港から都心へ向かう途中、エア・バスは海岸沿いを走った。芝生の上のんびり寝そべる人、木陰で本を読む人、ビーチで遊ぶ家族、手をつないで歩くカップルなど、車窓からはのんびりした、そしてちょっとイギリス風の休日風景が見えた。思わず、「こんな所で暮らしたい」というつぶやきが漏れた。そういえば、空港は「空の玄関口」という。シンガポールのチャンギ国際空港では蘭の花、花、花…が私たちを出迎えてくれたのだが、日本の玄関口の成田空港や関西空港、まして福岡空

港では、そんなお洒落心はみないようだと話し合う。

シンガポールは多民族国家として知られている。文字通り様々な文化的背景を持つ人々が違和感なくバス停に並んでいたり、買い物をしたりしている風景は、日本に住んでいる私には、少し不思議な感じがした。しかし、このような光景は、世界から真の国際化を求められている日本で見られても不思議ではないし、そんな日がいつか来るのだろうかと考え込む。「日本の街を歩いて、そこで出会う半分くらいの人が日本人でなくなった時に、日本の真の国際化が始まる」と誰かが言っていたのを、ふと思い出した。

後日、路線バスに乗った。同行してくれた留学生が、「ここは高級住宅街、あれは高級マンション、あれは政府の高層公共住宅、こちらは低所得者のアパート」と、説明してくれる。誰が高所得者で、誰が低所得者になるのかを聞いていると、貧富の差の構図も見えてくるような気がする。交通量を制限するために、自家用車の税金がものすごく高く設定しており、登録してから入手できるまで長い間待たなければならないそうである。煙草やチューインガム、ゴミのポイ捨てなど、罰金も多い。またコミュニティー・センターを通じてのサービスと統制など、「アメとムチ」の管理システムが敷か

れている。限られた人口・人材の中からエリートを育て上げ、そして一部のエリートが徹底して国や国民の管理を行うというシンガポールの姿勢の下で生きるのは、果たして幸福なのか、不幸なのか？（M. A.）

## (2) 足エステ

観光ガイドブックによると、シンガポールでのお勧めは足エステとある。あちこちにお店があるが、私たちは高島屋で買い物をしたついでに、最上階の足エステを試してみることにした。シンガポールの高島屋は、街並みの中でも目立って豪華だった。海外では高島屋やそごうなどの日本のデパートががんばっているというが、こんなに高い値段で誰が買うのだろうかと思うほど、目を疑うばかりの値段がついている。でもお客様の数が多い。ここで買い物できるのは、裕福な階層の人々なのだそうだ。超高級ヘアーサロンも、シンガポール人の女性らしき人々で混んでいた。

ただし、手頃な値段の品々が並ぶ地下の食料品売場は熱気にあふれている。ウィンドー・ショッピングで各フロアーを歩いてきた私たちも、ここではいろいろと買い物をした。驚いたのは、地下の食品売り場のフロアに、制服を着た高校生が大勢座り込んで話をしていたことである。高校生は世界中どこでも同じみたい。何か目的があるというわけではないが、ただ座り込んでダベっている。ここだと涼しいからだろうか？

高島屋での足エステは料金も高い。歩き疲れた足をマッサージしてもらうのだから、さぞかし気持ちが良いんだろうと思っていたのが大きな間違いだった。まず裸足になり、足を洗って椅子に座り、足を台の上においてマッサージしてもらうのだが、痛かったりくすぐったかったりで黙っていることができないくらいだった。マッサージしてくれるのは、どうやら中国から出稼ぎにきているマッサージ師らしい。こんな所でも、シンガポールの労働状況がわかる。シンガポール人は、こんな労働はやりたがらないので。片言英語でコミュニケーションをとりながら、それなりに楽しく時間が過ごせたが、一方では複雑な気もする。終了後は、足どりが軽くなつたが、財布も軽くなつた。

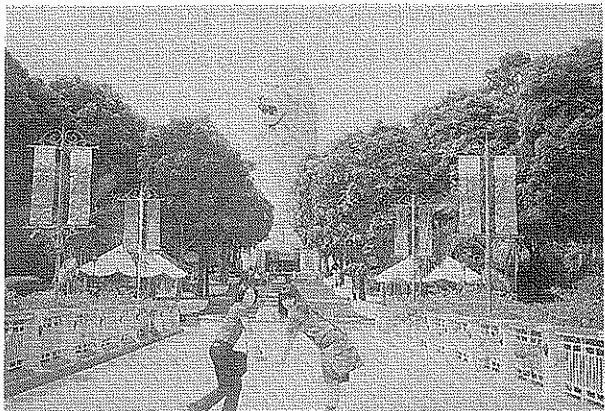
シンガポールにはフィリピンからのメイドさんをはじめ、マレーシアやインドネシアなどの近隣諸国から多くの出稼ぎ労働者が流入している。この人たちがいなければ共稼ぎもできないし、製造業や建設業の現場が困る。シンガポールでは単純労働者とは別に、専門職でも外国人に門戸を開いているから、外国人が働く場が多い。日曜日の夜、手に簡単なビニール袋を下げ

て歩く外国人労働者の集団に出会った。きっとショッピング・センターで仲間と1日を過ごし、手持ちのお金で買えるほんのわずかな品物を手に宿舎に帰るのだろう。同じアジア人でも、生まれた国によって大きな貧富の差がある。使う側に生まれるか、使われる側に生まれるか、人生は厳しい。（M. A.）

## (3) セントーサ島

シンガポールの観光の目玉の一つであるセントーサ島は、すばらしいリゾート地だった。ここへは、車で橋を通って、あるいはフェリーで、あるいは名物のケーブルカーに乗ってというチョイスがある。私たちはケーブルカーを選んだ。ケーブルの高さは60メートル以上もあるって、そこからの眺めは最高。眼下には海が広がり、マレーシア行きの客船が見える。マレーシアから重要人物（VIP）が到着したそうで、税関の出口では獅子舞をくりだして迎えていた。

島内はモノレールに乗って移動するようになっている。まず、この島へ来た観光客が必ず訪れるというアンダー・ウォーター・ワールドへ行ってみた。ここは巨大な水槽の中を80メートルもの長いアクリルトンネルが通っており、そこからいろいろな魚たちを見ることができる。この水族館は東南アジア最大だそうで、それなりに素晴らしかったが、最近は日本でも巨大水槽やトンネルを装備したすごいのが次々と出来ているから、少々期待はずれでもあった。ビーチに出ると、水着を着て日光浴をしている人がいたり、お弁当を食べながらのんびりしている人もいた。ゴミのない砂浜で、透き通った海をみながら午後の1時を過ごすのは最高だろうと思う。が、椰子の立ち並ぶ風景がどこか人工的すぎる。水質も年々悪くなっているそうで、「私はここでは泳がない」と、あるシンガポール人は言っていた。



ザ・マーライオン！

セントーサ島のシンボルは何といつても「ザ・マーライオン」。前日見た、マリーナ・ベイに立つ元祖マ-

ライオンが少々小さくて期待はずれだった分、感動的な大きさだった。高さ37メートルのザ・マーライオンの頭に登ると、晴れた日にはインドネシアの島々まで見えるという。とにかく巨大で、私が撮った写真には頭が写っていなかったくらい！

セントーサ島では、シンガポールの歴史も学んだ。イメージ・オブ・シンガポールでは、イギリスに統治されていた時代から独立するまで、ロウ人形を使って表現されている。クーリー（苦力）と呼ばれた中華系の人々の当時の苦しい生活や、生活水準の低さについて話し合ったり、日本が占領していた頃のことを見ながら戦争について考えたりもした。日本軍政下の日本語教育の展示を見て、案内をしてくれたシンガポール人学生が、「私の祖母もこの教科書を持っています。祖母は、『日本語の授業では、少しでも間違えると厳しく叱られるのでとても恐かった』と話していました。」と説明してくれたので、一同シーンとなってしまった。こんな時、どんな言葉を返せば良いのだろう。

アジアが奇跡的な経済的発展に浮かれていた頃、セントーサ島には韓国や台湾、インドネシアやマレーシアなどから多くの観光客が訪れていた。色々な施設に入るのに長い行列が出来て、どこも人、人、人で埋め尽くされていたそうである。だが、私たちが訪れた時には、セントーサ島は閑散としていた。案内を引き受けてくれたシンガポール人によると、こんなに閑散としているセントーサ島に来るのは初めてということであった。シンガポールはブランド品が安く買えるショッピングセンターとして観光客を集めてきたが、アジアからの観光客が激減し、またオーストラリアからの観光客も減ってきてているという。頼みの綱は、日本と台湾だけというが、どうだろう。

(M. A.)

#### (4) アラブ・ストリートとリトル・インディア

「シンガポールが多民族国家であることを実感したければ、チャイナ・タウン、アラブ・ストリート、そしてリトル・インディアへ行くこと」と、観光ガイドブックにはある。中国系の伝統文化を守ろうとする動きは、例えば、クラーク・キーの野外舞台で週に3回開かれる京劇を支える人々の生き方を描いたストーリーから察することができる。これはNHKで放映された。若者もがんばっているのだが、関心をもつ人々は少なくなりつつあるという。

限られた訪問時間の関係で、今回私たちは、私たちにとっては未知なる領域、言いかえれば、チャイナ・タウンよりももっと不思議な世界がありそうなアラブ・

ストリートとリトル・インディアを散策し、イスラムとヒンドゥーの香りを嗅いでみることにした。どちらのストリートも全部を歩いてみる時間はないので、アラブ・ストリートでは、サルタン・モスクあたりを、またリトル・インディアはスリ・ヴィラマカリ・アマン寺院あたりを散策したにすぎない。スルタン・モスクではここを訪れる日本人が多いせいか、注意事項など日本語でも表記してあった。裸足になってモスクに上がると、中はひんやりとして涼しい。お祈りを捧げる人が数名おり、厳粛な感じがする。私たちは信者ではないのでモスク中央には入れないが、回廊を静かに歩いた。一人一人の区画が整然と定められており、満員になった時の雰囲気が察しられる。イスラム教は人間の生理にとても叶った宗教だと本で読んだが、暑い昼間に冷たい水で身を清め、涼しいモスクに入り、屈伸運動のような祈りのポーズをとることで、体がリフレッシュされ、午後の仕事もはかどりそうな気がする。私たちも廊下に座り込み、ひと休み。

スルタン・モスクの前は保存開発が進んで、正面一画が「キレイな観光地」になっていた。チャイナ・タウンでも、リトル・インディアでも、同様な保存開発が進んでいるそうだ。リトル・インディアの表の顔、セラングーン・ロードを歩くと、金やジュエリーを売る店、サリーを売る店などが立ち並んでいる。私たちが立ち止まって見たのは、生花を次々と糸に通してレイをつくっている露店。ヒンドゥーの神々に捧げるレイをつくっている。通りのあちこちにあって、花の香りがするようだった。サリーを来た女性が行き交い、インドにいるような錯覚に陥る。極彩色の寺院、色とりどりの商店や街行く人をあとに、タクシーに乗った。

(A. I.)

#### (5) イースト・アンド・ウエスト

シンガポールの昼の顔は青い空ときらきら輝く太陽、色鮮やかな建物とそして多くの緑に囲まれた誰もが憧れる街である。しかし、夜の顔もまた絶品である。歩道を歩くと、公園でもなんでもない所でセンスよくライトアップされた熱帯雨林の木々があつたり、高温多湿の中でやすらぎを感じるような噴水があつたりと、街角にいろいろな工夫がなされている。それから何といっても所狭しと立ち並ぶ高層ビル群の夜景。言葉にならない程きれいである。そんなシンガポールの夜景を、私たちはちょっと変わった方法で見ることができた。ボート・キーからクラーク・キーまでリバー・タクシーで渡り、クラーク・キーからシンガポール川を

遊覧するクルーズとシャレた。といっても、ボートは昔の中国風パンボート。やたらとエンジン音がたかく、ちょっと不安になるようなものだ。BGMは中国語の歌謡曲で、溜め息のできるような美しい光景とは少し雰囲気が違うような気もしたが、そこは多民族とはいえ中華系の人々がメインの国ということで納得。

「一時は水質汚染がひどいシンガポール川でしたが、10年前に大掃除を行い、今では魚が帰ってきました」という説明があったが、やっぱりドブ川のような感じがする。ビジネス・ビル街、ラッフルズ上陸記念地、国會議事堂を過ぎ、ゆったりと波に揺られていい気分で景色を眺めていると、シンガポール名物のマーライオンの姿が見えてきた。「わあ、マーライオンだ」という感激の声のすぐ後で、「小さすぎる」と落胆の声。噂では聞いていたが、それ以上にミニサイズだった。それでもパシャパシャと写真を撮りながら、舟は海に出た。川の波とは違い、海の波は少々荒い。舟に対する不安感と大きな波とで、転覆するのではとヒヤヒヤする。西洋風の建物、東洋風の建物、そして超高層ビルと、さまざまな顔がライトアップされている。

シンガポールで東洋と西洋の融合を見ようと、ラッフルズ・ホテルを覗いてみた。サマセット・モーム、ヘルマン・ヘッセ、グレース・ケリーやエリザベス・テラーなどが滞在したこのホテルは、「東洋のエキゾチックな神話のために存在する」と称され、東洋と西洋の文化の出会いがあった。日本軍占領下には沼南旅館と改名させられ、従業員は着物を着せられたと言われる。向かいには、有名女子校をショッピングセンターに改造したチャイムスがある。いずれも、白い回廊に椰子の木が並び、白いテーブルが並んで、ちょっと映画を見ているような感じがする。夜にはフランス風のシャレたロビーが自慢という、メリディアン・ホテルに行ってみた。このインテリアも欧風を基調にアジアの風味がきかせてある。西洋のお洒落心と東洋のお洒落心、西洋のマナーと東洋のマナーが融合した20世紀初頭のシンガポールの面影を残す場所を訪ねてノスタルジアに浸った私たちだったが、それらの歴史が今日観光の素材となっていることに、あらためて人を惹きつける「場」とは何かを考えた。  
(M. A.)

## 2. インドネシア見て歩記

### (1) ベチャ

ジョグジャで名物(?)のベチャに乗った。ベチャとは人力車のことと、お客様(2人掛け)が前に乗って、こぎ手はその後ろで自転車をこぐようになっている。インドネシアの地方都市では市民の足となっていて、気軽に乗れる乗り物として利用されている。見た目にはゆっくりそうだけれども、実際に乗ってみると意外に速い。市内をかけぬけると、生あたたかい空気も不思議に心地よく感じられた。しかし、その私たちの背後には、汗だくになりながらベチャをこぐ運転手さんがいる。力のいる仕事であるが、私たちへのサービス(笑顔)は欠かさない。大変だなと思いながらも、仕事だから…という想いでいた。

しかし、そうでもないらしい。聞くところによると、このような乗り物に喜んで乗る観光客は、日本人かアメリカ人ぐらいだそうだ。ヨーロッパの人々は昔の主従関係、奴隸制度、植民地時代の差別等を再現しているような点がいやで、ベチャにはあまり乗らないそうだ。開発教育を学び、先進国と開発途上国との関係を考えてきた私は、それを聞いて考えさせられ、興味本位で乗ってしまった自分が少し情けなかった。

ベチャは借り物で、親方に1日の収入の3分の1を支払うと、ベチャおじさん達の手元に残るのは700円程度とか。田舎から出稼ぎに来ている人も多い。そんな人達にとって、インドネシア人の10倍くらいの値段をつけられる外国人観光客は良いお客様であるから、客取り合戦には熾烈なものがある(インドネシア人の値段では絶対に乗せてくれない、一般に10倍くらいだといわれている)。外国人観光客をとった人と、それなかつた人との間でも軋轢が生じるだろう。観光客からしてみれば、「現地の人の収入に貢献したのだから、いいじゃないか」という声もあるだろうが、リキシャから景色を眺めて単純に喜ぶのも芸がないような気もする。今回に限らず、観光に行った先では、観光客が現地の人々の日常生活に介入することによって、このような落とし穴がいっぱい存在するのだと思う。そして観光客が気がつくことのないまま、当たり前だと思って行動していることの中に、考えるべき課題がたくさん含まれているのだと思う。  
(M. U.)

### (2) ジュース売り：その1

インドネシアの観光地では、暑さのために、冷たい飲

み物を売り歩く人々をよくみかける。アイスボックスに氷を詰めて、ミネラル・ウォーターや缶ジュースを冷やして、歩いている観光客に近づいてくる。ガイドブックには、「栓がきちんとしているものであれば安全」と書かれているから、空き瓶に水を詰め直して売りに来る人もいるのだろう。一人から買えば、「買ってくれる客、買ってくれそうな客」と見られるのか、また別の人人が売りに来る。「今、買ったばかりだから」と言って手に持っている品物を見せて、なかなか離れない。氷と飲み物を入れたアイスボックスはかなり重そうだ。それを肩からぶら下げて、あちらこちらと歩き続けるのは重労働だろう。

イモギリのスルタンの墓は何百段もの石段を上がった所にあった。途中で、「いらない、いらない」と言い続けても、一番上に到着した頃には喉が乾いてくるから、頂上ではジュースがかなり売れるようであった。こんな所にも場所代があるのか、一番良い場所でジュースを売っているのは、どうやら墓を管理する人々の一族らしかった。入場料の上に幾重にもチップをとって、更に飲み物を売って、お金が入るようになっている。墓詣でをすまし、喉も潤うと、あとは石段を下りるのみ。途中のジュース売りから買う人はほとんどいないという仕組みになっている。儲かる人は、さらに儲かるようになっている！

石段をずっと降りた最後のあたりに、小さな子どもを連れた若い母親がジュースを売っていた。もっと上の良い場所で売るための場所代が払えないのか、それとも重いアイスボックスと小さな子どもを抱えてでは上まで登れなかったのか。この親子の前で、手にジュースを持ったヨーロッパ人が立ち止まり、さらにジュースを2本買い求めていた。ジュースはもう必要ないけれど、状況を察してのチャリティー精神かららしい。そんな小さな親切が分かったのか、小さな子どもと母親は本当に嬉しそうな顔をしていた。が、買った側も嬉しそうな顔をしていたのが印象的だった。（M. U.）

### (3) イモギリ体験

イモギリはジョグジャカルタから約10キロの所にある。スルタンの墓所となっていて、正装をすれば奥まで入れる。観光客には入口で衣装を貸してくれる、とガイドブックには書いてある。このガイドブックは普通のものではなく、親子でインドネシアをすみずみまで歩いて穴場を紹介したもので、イモギリは大変印象に残ったと記載されている。現地に着くと、通訳の女性が「10年間観光ガイドをやっているが、イモギリに

行こうという観光客に会うのも初めてだし、私自身も行くのは初めて」と言うので、少し心配になる。



ここは良いとこ、一度はおいで！！

3百段以上もある石段を汗だくになって登ると、スルタンの墓守たちの詰め所がある。ここで正装に着替えなければならない。スルタンの王宮にも昔ながらの衣装を身にまとった警備の人たちがいたが、これらの人々はみんな腰に真剣をつけている。通訳の人が持参してくれたバティックを墓守がチェックし、「これは良い、これはダメ」と選り分けている。本物のバティックしか許されないと。良質の綿が素材で、ソガといわれる植物染料で染められた物でないとダメらしい。結局、不足分はここの詰め所で貸してもらった。詰め所の後ろにある更衣室らしき所で、女性たちが着付けをしてくれる。短い方の布きれは、胸にぴったりまいて上着になり、長い方の布きれは腰に巻いてロングスカートになる。財布以外は墓所への持ち込み禁止。

中に入ると、初代スルタンの墓所の前に地元の人々が列をつくって座っており、廟からはお祈りの声が流れてくる。観光客には優先権があるのか、地元の人々は私たちに先に行けという合図をする。廟の中は暗くて狭い。僧侶が2名、石棺の左右に座って祈りを捧げている。地元の人々のまねをして、僧侶に貢ぎ物を捧げ、地面にひれ伏すような祈りのポーズをし、香の香りにむせかえるような小さな部屋の中で汗だくになる。この石棺を3百年だか、4百年だか守り続けているのだと言う。女性の墓参者も多かったが、祈りを捧げる姿は真剣そのもの。まるでスルタンが今亡くなつたかのような嘆きの声を投げかけている人もいる。石棺の中の初代スルタンは、今どんな状態にあるのか知らないが、毎日これほどの人々に囲まれて、さぞ幸せなことだろう。スルタンの墓所というのでイスラム教的な環境を想像していたのだが、ジャワの風土に合ったものに変容しているようだった。

（Y. Y.）

#### (4) ジュース売り：その2

プランバナンのヒンドゥー教寺院群に到着したのは夕刻に近かった。ここでもジュース売りがたくさん寄ってきたのだが、涼しくなってきた頃で、喉は乾いていない。何度も「いらない、いらない」と追い払うようになっていたが、若い母親らしき人を追い払いきれなくて、ジュースを買った。しかも、値段を間違えてゼロの一つ多い紙幣を渡してしまったのだ！飛び上がって喜ぶジュース売りの女性。あまり嬉しかったのか、その紙幣を仲間のジュース売りに見せびらかして回っている。私たち観光客が持っているゼロの多い紙幣は、人々にとってはめったに見ることのできないような高額紙幣なのである。ジュース1本25円のところを、間違えて250円で買ったのであるが、ちょっと前までの物価が安定していた頃の換算率でいえば、ジュース1本に1,500円もあげたことになる。飛び上がって喜ぶ姿もうなづける。

この時ジュースを売っていた中には、おばあさんもいたし、子どももいた。みんなそれぞれに家族があって、家庭の事情があって、同じようにジュースを売っていたのだろう。そんな中で、たった一人に、しかも高額な紙幣を渡してしまったことで、どんな影響が出るのだろうか。この人たちは、今後日本人と見ると、高い値段をふっかけるようになるのだろうか。そんなことが気になる出来事だった。

これは、チップについてもいえる。日本人は全くチップをあげないか、高額チップをあげすぎるので気をつけましょうと、観光ガイドブックには書いてある。ところが、私たちもやってしまった。インドネシアのホテルでは、ルピアの混迷もあってチップの額が決められず、最初は大サービスすることになってしまった。つまり、ゼロの数が一つ多いお札を渡してしまったので、それからというもの我も我もと用事もないのにボイイが部屋を訪れることになってしまった。部屋に落ちついてよく調べてみると、テレビでホテル案内の情報が流されており、ボイイには荷物1個に付きチップがいくらくらいと、きちんと提示されていた。情報を使いこなせないと、こんなことになる。

(M. U.)

#### (5) 物売り

どこへいっても必ず行く手を阻むのは土産売りの人々だった。日本人観光客がいかに沢山訪れているのかが伺える。カタコトの日本語で、「コレ、ヤスイネ、ボウシ」などと後から着いてくる。買うそぶりを少しでも見せたらそれこそ逃げられなくなるので、とにかく知

らんぶりで通した。車に乗っても、発進するまで窓ごしに商品を売ろうとし、本当にしつこかったが、生活がかかっているのだからしかたがない。私達メンバーの一人はインドネシア語で「チダアーツタ！」（「いらない！」）と叫んでいたが、最後には声も枯れて、力なく「チダアッタ…」とささやいていた。ポロブドゥールでは物売りの人を避けようと園内を走るトロッコ・バスに乗ったのだが、たくさんの物売りが乗ってきて、座っている間中「ヤスイネ、カワイイ、キレイ、カワナイト」と、お世辞を言ってまで頑張って物を売ろうとする。やっとのことで出口にたどり着き、バスに乗り込んで、もう追ってこないだろうと安心していると、オジサンが一人バスにつかまって来た。それを見て他の人々も負けじと飛び乗って来る。そのオジサンはバティック（更紗）の付いたカードを懸命に売ろうとする。最初は無視していたが、実は丁度欲しかったものだったし、それに一度値段交渉がしてみたいと思っていたので、「高い高い」と言ってみた。すると次第に値段を下してくれる。試しにこちらから値段を持ちかけると、「ソレハヒドイ」と言う。最後には「オキャクサン、ワタシノメ、ミル」と、目で訴えられ、何だか自分が悪人に思えてきた。こうやって土産を売る人達にとっては、この収入が家族の大切な収入源なのである。希望の値段ではなかったが、最初よりかなり安いのでまあいいかと思って購入した。するとすぐに、別の物売りの人が同じ物を持って来て、しかも最初に私が望んだ値段を言ってきたのでガックリ。最初の人は、初めはその倍の値段をもちかけてきたのだが、なぜこんなに大きな差があるのだろうか。だいたいの相場はあるだろうが、日本人を見てふっかけたのだろうか、それとも生活状況に差があるせいなのだろうか。いずれにせよ、私達からみれば大差のない値段であっても、彼らにとっては一回の食事代になるほどの差になってしまう。それを考えると、ねぎり交渉の根気比べでも重みを感じてしまうのだった。

(A. I.)

#### (6) インドネシアの芸能

インドネシアの芸能には、詩や音楽、舞踊、演劇、絵といろいろある。スルタン王宮では毎日10時から違った出し物がされているし、ホテルのシアター、野外劇場、工芸センターや博物館などの出し物など、場所も様々ある。ガムラン音楽は有名であるが、ガムランは主として青銅と竹を素材とした打楽器で構成され、楽譜は暗記されていて、ベテランの奏者が延々と音楽を奏でる。演奏中でも、自分の出番がくるまでタバコを

一服しているおじいさんや、隣の人とお喋りをしているおばあさんがいるなど、奏者も手慣れたものである。

プラウイサタ・オープンシアターにラーマヤナを見に行った。客席はオーストラリアやアメリカ、日本などからの観光客でうまっていた。インドの長編叙事詩「ラーマヤナ」の一部を踊りにしたもので、王位継承にまつわるトラブルにまきこまれたラーマ王子が、魔王プラーーウァナに誘拐されたシーター姫を猿の援軍とともに救出する物語は、幻想的であった。なによりも、シーター姫の動作の優雅さに見とれてしまった。物語の最後で、ラーマ王子がシーター姫を疑って炎の中に飛び込めと言うくだりでは、男性の身勝手さに頭に入るくらいストーリーにのめりこんで観劇した。見上げると、星空。日本に比べると、星の数が多く、輝きも一段と強い。と、流れ星が舞台の上をよぎって、こちらから向こう側に流れていった。観客から、どよめきが漏れた。幻想的なラーマヤナ物語は、神秘的な流れ星の力を借りて、一層の盛り上がりをもって上演されたのであった。

ワヤンクリとは、東部・中部ジャワや、スンダ、バリなどで人気のある人形影絵芝居のことである。水牛の皮でつくった平たい人形が、ランプの光を受けて白いスクリーン上に影を映し出す。一人の影絵師がすべての人形を操り、音声を使い分け、歌を歌い、ガムランに指示を出す。何十もの人形を一人で全部操る技は、息を飲むほど。博物館で上演されたワヤンクリを見に行ったのであるが、スクリーンの前後を行き来して、どちらの側も見ることが出来るようになっていた。昔は、人形の色の付いた方が見える側に男性が、影絵となる方に女性が座ることになっていたそうである。男性は、色付きの人形、それを操る影絵師、その後ろにいるガムラン奏者などを見ることが出来、女性はスクリーンに映し出される影絵のみを見ることが出来たのだという。ルピアの暴落と政治不安とで、観光客はめっきり減り、この日のお客は私たちの他に数名。観光客がいようといまいと、毎日夜8時から10時くらいまで上演しているという。地元の人々もテレビや映画を好む今日、ワヤンクリは生き残れるのだろうか。

(R. I.)

#### (7) ラーマヤナ・メイク

プラウイサタ・オープンシアターでラーマヤナ舞踏を見た際に、入口で簡単なストーリーの書かれた紙をもらった。その説明書は日本語で丁寧に手書きされたものであったが、数箇所の漢字のミスや濁点の打ち間違いなどから判断して、インドネシア人が書いたもの

だと察っしられた。日本語の説明書きが用意されているということは、日本人客がよく訪れているということを示す。いくつかミスはあったが、大変読みやすい文字で書かれており、このおかげで内容も理解しやすかったことは確かである。こんな所で日本語に触ることができて嬉しかった。入場料は一人6万5千ルピア(日本円で約1,200円)。現地の人にとってはやはり高額なのだろう。

ラーマヤナの上演が終わると、役者さんと一緒に記念撮影ができるようになっている。シーター姫を演じた役者さんから、「ラーマヤナ・メイクをしませんか?」と聞かれた。同じ衣装をつけて、メイクアップもしてくれるという。通訳の人によると、シアターの経営者は大変儲かっているそうだが、役者にはわずかの賃金しか払っていないそうで、一人一晩踊って3千ルピア(日本円で約65円)にしかならないという。「あれだけの演技をして、たったそれだけ?」と、私たちはこのシアターの経営者に猛烈な怒りを感じた。今の物価高では食費にもならないので、メイクをやって余分な収入を得て、それで一家がなんとか食べているという説明であった。演技をした劇団は大家族制となっていて、声のかかったシアターで上演するのだが、そういう劇団がいくつもあって、いくら少ない賃金でも働き続けないと、他の劇団にシアターとの契約をとられてしまうということであった。

翌朝7時、私たちのホテルの部屋に昨夜のラーマヤナに出演していた踊り子さん方が4名来て、衣装を着させてくれたり、メイクまでしてくれるという特別企画が実行された。子どももついてきて、お母さんの仕事が終わるのをじっと待っている。通訳の人も来てくれて、てんやわんやの衣装替えとなつたが、自分が何に仕上げられるのかわからない。ゴチャゴチャやっている内に、一人はシーター姫、一人はシーター姫の従者、一人は魔王プラーーウァナの妻、もう一人は鹿の精である



ラーマヤナの世界に浸る

ことがわかった。「衣装と化粧は神に近づくため」になされるのだという。神に一步近づいた私たちは、ホテルのロビーで記念撮影。観光客たちも、ホテルの支配人までも出てきて、写真を撮っていた。衣装を脱いで、料金とチップを手渡した。「これで朝食が食べられます」と言って帰っていったあの人達、今日もシアターで踊っているのだろうか？

今回のインドネシア観光で特に感じたことは、富の不公平な分配である。バティークや銀細工の工場に立ち寄った時も、芸術的な技で製品を仕上げていくクラフトマンがたくさん働いている風景をみせてもらい、その横にある直営のショップで「手頃な値段」で品物を買うという観光団式があったが、どれだけの賃金が支払われているのだろうと疑問に思った。この国では、ビジネスを始めたり、お店を開店したりするにはライセンスが必要であり、資金がない人は何もできないようになっている。しかもそのライセンス料は、大統領一家の誰かの懐に入る所以である。金持ちはますます富み、貧乏な人々はいつまでたっても貧乏というしくみに、今回通訳になってくれた社会人学生は大いに怒り、絶望していた（そんなことは、もちろん人前では言わないのだが）。銀細工工場では、工場の横にある豪邸を目でさし示し、「あの家は誰のものだと思いますか？」とそつとささやいた。工場主は富み、技を持つ従業員は低賃金で使われる現実を目の当たりにし、お土産品を買う気分は消失した。

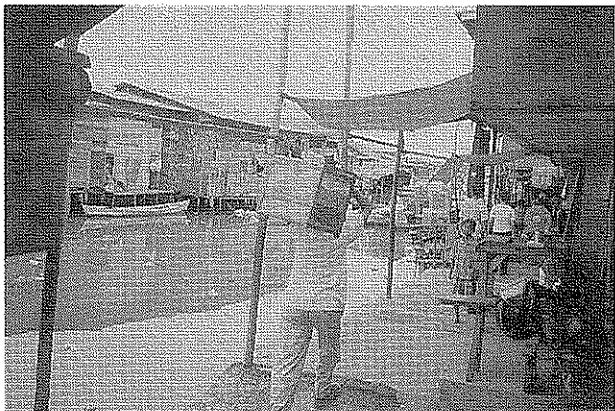
(R. I.)

#### (8) ジャカルタ：コタ地区

ジャカルタのコタ地区（旧バタビア）は、オランダ植民地時代の中心地であり、その当時の建築物が保存されている。港にはインドネシアのボルネオ島などから木材を運搬してきた船がたくさん泊まっている。何日もかかって航海してくるということだったが、こんな船で沈没しないのかと心配になる。大量の木材を積み込むため、船は高い構造になっており、甲板から長い板を渡して、その上を人夫が重い木材をかかえて綱渡りのように行き来している。板の下はドブ川のように汚れた海。落ちたらそれこそ真っ黒で、ひどい匂いがするだろう。一隻の船に乗せてもらえた。細い長い板を歩くにはバランス感覚が必要である。材木は持ち上げられないほど重い。重労働でもわずかの賃金が支払われるだけというが、女性も同じように働いていた。どの人も日焼けで真っ黒になった顔をし、観光客をよそめに黙々と働いている。同じ時代を生きながら、観光客の住む世界と、ここで働く人々の住む世界は、あまり

にも違いすぎる。

港の近くのパサールイカン（魚市場）には果物屋、雑貨屋、自転車屋などが立ち並んでいたが、市場のすぐ近くには高層ビルが建っていて、貧富の差というものを感じさせた。雑貨屋の並ぶ通りを進んでいくと、水上スラムに出た。テレビでよく放映されるような、水上にパラックが建てられただけのスラムが目の前に広がっている。雑貨屋のあるこちら側から水上スラムまでは、木材の切れ端と丸太で作られた頼りない橋の道が続いている。道のあちこちに、お金を求める人が立っていた。コインを入れると音がするので盲目的な人にわかるが、お札をいたのでは音がしないのでわからない。たくさんあげた方が良いと思ってお札を入れたが、音がしなかったので誰か他の人に取られてしまったかもしれない。金額が少なくてコインをあげれば良かった。こんな所にも、生き残りのルールがある。



水上スラム

江戸時代の初めに混血であるがゆえに日本を追放されたジャガラタお春は、この辺りに住んでいたという。のちに商売で成功したという彼女も、ここに着いたときにはどんな気持ちがしただろう。私たちはコタ地区に住む人々の中に入つて居所の無いような恐怖感におそれ、グループからはぐれないようにと細心の注意をしながら歩いた。明治の初めに、シンガポールやジャカルタ、遠くはアフリカまで送られたというからゆきさん。その人たちが異国に到着したときの恐怖感というものが、少し察っしられるような感じがした。

(M. U.)

#### (9) ボロブドゥールを実感

ボロブドゥールの公園内では、花が静かに風に揺れていた。この世であつて、この世を越えた世界に、今私たちは足を踏み入れようとしている。遠くから巨大に見える建造物の真下まで行くと、想像していたよりは小さく感じるが、これは目の錯覚だろうか。階段のふ

もとではライオンの像が番をしている。階段を上って、まず第1回廊を時計回りに巡る。幅2mほどの回廊の壁の左右には、釈迦の教えを説くレリーフが続いている。その数は2,500面以上、登場人物は1万人を超える。その繊細さと優柔な彫刻形式は、まさに芸術品である。かつて巡礼者達は、このレリーフに表わされたブッダの生涯や教えを見ながら、順に上層へ上って行ったのだ。ここに来る前に立ち寄ったオーディオ・センターで説明を受けた、寓話や釈迦の教えを示すレリーフを探しながら回ってみる。中には破損していたり、未補修の物もあり、この寺院が崩壊寸前でジャングルの木々の奥から発見された当時をちょっぴり偲ばせてくれる。マヤ夫人の受胎告知の夢の場面や、釈迦が生まれてすぐ歩きだし、その足跡にハスの花が咲く場面など、実際に自分の目で確かめることで感動もさらに広がった。下層は欲のある俗世界を表わし、上層に行くにしたがって欲がなくなり、最上層は人間の形さえも無となる精神的世界を表わしている。回廊を上がる度に門があり、そこをくぐる度に過去の災いや罪が消滅するのだという。

第4回廊から最後の階段を上ると、急に世界が変わったかのように視界が開けてきた。そこは、今までの迷

路のような方形層とは全く雰囲気の違う円盤になっており、頂上の大ストゥーパを中心にして、釣鐘形の小ストゥーパが三層構造になって合計72基、規則的に並んでいる。(ちなみに、日本語の「卒塔婆」の語源はストゥーパである。ストゥーパ、ソオトゥオーパ、ソトバ)。ストゥーパには格子形の切り窓があり、中を覗くと仏像が安置されているのが見える。一番上から見渡すと、ボロブドゥールが広大な椰子の樹海のなかにあることがわかる。大自然のなかで、1000年以上もの間人々の目に触れず、歴史から消え去っていたボロブドゥール。その名の由来も、建築の目的も不明で、完成と同時に埋められたという説もあり、謎多き遺跡である。

爽やかな風をうけてボロブドゥールの荘厳さに浸っていると、あるストゥーパに人が集まっている。見ると、みんな懸命に腕を格子窓の中に伸ばしている。話によると、この中の仏像の右手薬指に触ると願い事が叶い、特に女性は良縁に恵まれるということだった。となれば私たちも挑戦しないわけにはゆかない!それはもう、みんな必死。めでたく成功して「結婚できそう!」と喜ぶメンバーを横目に、最後まで仏像に手の届かなかった私であった。

(A. I.)



### III. 食は東南アジアにあり

#### 1. シンガポール編

##### (1) 機内食

シンガポール航空の機内食では、肉料理か魚料理のどちらかを選べることになっていたが、Fish or Meet?と聞かれて何度も聞き返す乗客も多かった。肉料理は牛肉を煮込んだもので、非常にやわらかくて食べやすかった。ポテトを磨り潰したポテトサラダもなかなかの味。一方、魚の方はうなぎの蒲焼き。こちらは日本人乗客に人気があり、途中で品切れとなっていた。シーフードサラダ、パン、茶そば、デザート、チョコレートなど種類が多く、盛りつけもきれい。ヨーロッパ系の航空会社と違う点は、パンやチーズなどを減らして、その分アジア系の料理で置き換えていること。

帰りの機内食は、朝食が出る予定であったが、日本を直前にしての天候不慮のためサービスが途中で中止され食べ損ねた。朝食が配られた少数派と、配られなかつた多数派の間で心理的葛藤が…。特に、朝食を食べている列と食べ損ねた列が並んでいる部分では、側でお互いが見えるだけに複雑な心境。マイノリティーが「持っている側」、マジョリティーが「もたざる側」という力関係にある時の群衆心理に近いものを感じた。この場合、食べ損ねた多数派の怒りは、機内のキャンピング・クルーに対して同時に、朝食が配られた少数派に向けられたのであった。

##### (2) シンガポール料理

シンガポールでの食事は、とにかく「美味しい」の一言。気分が悪くなるほど「あまい」ものから、口が切れたのではないかと思うほど「からい」ものまで、様々な種類の食べ物があった。3月初旬の肌寒い日本から、いきなり熱帯性気候の中に到着した私たちは、「暑い、暑い」の連続でバテそうになったが、そんな中でバイタリティーを持続させるためには、このような辛い食べ物を吃るのが一番だと感じた。こうやって激辛な味に慣れた舌には、異常なほどの甘さにでもしないかぎりは、甘いと感じられないであろうから、甘い方はしつこいほど甘くなりすぎるのか…と、そんな風に考えてもみた。

あまりにもたくさんの種類の物を食べ過ぎて、何を食べたかもはっきりと覚えていないくらいである。とにかく、思い出したものから挙げていく事にしてみる。まずは、ポート・キーで食べたシンガポール料理。「え

采野 恵

っ、シンガポール料理ってあるの?」と思つていてはまだまだ。シンガポールは多民族国家で、様々な民族が暮らしている。もちろん、民族料理（例えばマレー料理、広東料理など）もあるのだが、その民族の料理が融合しあつて独自のシンガポール料理をつくりあげているのだ。実際にシンガポール料理といわれるものを見ると、どこかの料理の変形にすぎないのではないかと思うのだが、ともかく存在する。シンガポールがイギリス植民地化にあった時の港であり、たくさんの荷が積み卸しされ、中国から入植したクーリー（苦力）が大勢働いていたというポート・キーには、今では川沿いに多くのレストランが立ち並んでいる。その中からシンガポール料理の店を選ぶのは至難の技であるが、地元の大学生が「これはそう、あれは違う」と言いながら歩くのを、「え、どうして、どこが違うの?」と思いながらついて歩き、ともかく一軒の店に落ちつくことができたのであった。

主に海鮮料理で、海老、蟹、帆立など海の幸を満喫することができる。カレーの野菜煮込みは、口に入れたときは野菜の味がジワっとするのだが、あとから口のまわりがヒリヒリとしてくる。蟹は吃るのが面倒であったが、香辛料がきいていて美味しいかった。ちゃんとフィンガーポールもでてくるから安心。先生オススメの品はパイナップルライス。はじめは「パイナップル?」と聞いてみんな引いてはいたものの、食べてみるとパイナップルとチャーハン風のご飯がマッチして非常に美味しい。そして、シンガポールといえば「タイガービール」。なまあたたかい空気の中で冷えたビールは格別だった。ここでは料理もよかったです。日本ではなかなか味わうことができない雰囲気の中で食事をすることができた。オープンテラス、隣のテーブルに座ったドイツ人グループとのやりとり、目の前を明かりを灯して行き来する船、テーブルの上で揺れるろうそく、どこからともなく流れてくる音楽…。幸せな夜を過ごすことができた。

\*

シンガポールでの宿泊先はYMCA。ここの朝食は本当にシンプルだが、気楽にとれる。ジュース、コーンフレーク、トーストにクロワッサン、スイカやメロン、そしてコーヒーか紅茶。はじめ見たときはかなりびっくりしたが、よく考えてみると確かにホテルで注文

するコンチネンタル・ブレックファースト（アメリカン・ブレックファースト）は、高いお金を出してもこんなものである。ここのおススメはシンガポール式朝食のお粥、チキンポリッジ。ネギや魚の粉末など、自分でトッピングできておいしい。ただし、お米に独特のにおいがあるので、これがだめなという人もいるようだ。

\*

訪問先の国立シンガポール大学のスタッフ・レストランで昼食をごちそうになった。スタッフ・クラブにはソファーを並べたラウンジがあり、外はスタッフ専用のプール。プールサイドではちょっとしたソフト・ドリンクが飲めるようになっている。「何でも好きな物をどうぞ」と言われ、メニューとにらめっこ。結局、全員違うものを注文してみることにした。チキンライス、ナシゴレン、ミーゴレン、ワンタン、ラクサー、ホッケンミーなど。日替わりの定食は曜日によって異なる民族料理となっていたが、ちょうど訪問した日は「日本料理」。せっかくここまで来て、これを注文する気にはなれない。

シンガポールでは、だいたいどこでも漬物のかわりのようなもの、グリーンチリとレッドチリを切った物がでてきた。これはものすごく辛いけれど、慣れるとやみつきになる。あとでスーパーに行って、ピンズめのものを買い込んだ学生も出たほど。料理はどれもこれもおいしくて大満足。ワンタン以外はビリ辛料理で、ヒーヒー言いながら食べた。

\*

シンガポールといえば、フルーツの王様と称されるドリアン。慣れるとやみつきになるが、匂いがきついために地下鉄やホテルには持ち込み禁止となっている。そのドリアンが食べられるドリアンハウスに行った。シンガポール川をリバータクシーで渡って、クラーク・キーに着く。ここでは毎週3回程度、川沿いにたてられた舞台で京劇が演じられるとNHKで放映された所。ドリアンハウスには、生のドリアンから、ドリアンジュース、ドリアン・パンケーキ、ドリアン・アイスなどがあった。その他、マンゴなどもある。行く前の威勢の良さに比べて、お店に入ってからは「臭い、恐い」で、実際に味見したのは2名のみ。

### (3) ホーカーズ

シンガポールといえば、ホーカーズ。ホーカーズはビルの谷間や公園の一角などに小さな屋台がたくさん集まつた屋台街で、庶民文化の一つ。ガイドブックによると、衛生管理が厳しいので衛生的とあったが、本當

にそうだなと思うこと所から、少し怪しいと思える所までいろいろだった。まず、シンガポール航空の機内誌で紹介されていた高島屋地下のホーカーズで夕食。ともかく色々なものを味見したかったので、1つのトレーで4種類のおかずを注文できるという欲張りなものを選んだ。4、5ドル（400円くらい）だったように思う。ここではまず席を確保し、替わりばんこに注文を行った。人気が高いためか混雑が激しく、席を確保するのが一苦労。席待ちの人は、もう少しで食べ終わるそだなあと思われる人の後ろに立って、早く食べてくれといわんばかりのプレッシャーをかけている。ああいう風にやるのかと思いながら、これがなかなかできなかった。しかし、そんなことを言っていたら、ここではご飯にはありつけないのだ。

食後、せっかくシンガポールに来たのだからと思い、アイスカチャを食べた。アイスカチャとはいわゆるかき氷で、基本型は底にあんみつ、真ん中が氷、そして上に果物などをトッピングして、締めはコーンの汁がかかっている。私は自分でトッピングを選び、あれもこれもと欲張って盛りつけたため、すごいものになってしまった。欲はかくものではなく、結局自分の席にもどるまでに一番楽しみにしていたアンニン豆腐を落としてしまった。「やってしまった」と思うと同時に、この国はゴミを落とすと罰金の国だと思い出し青くなっていると、お店のおばちゃんが「いいよ、ほっとき」というそぶりをしてくれた。まだどうしようか迷っていると、掃除のおばちゃんが来て、「いいよ」といって掃除をしてくれた。ありがとう。

セントーサ島行きのフェリー乗り場の近くのホーカーズで昼食。ここはバス停の側ということもあり、いわゆる観光客が全くなくて地元の人が利用しているところ。今までのホーカーズとはまた感じが異なる。ここでもまず席を確保することから始まる。昼食時ということもあって、忙しそうな人々でいっぱい。スーツを来て携帯電話をもっているようなビジネスマンやオフィスレディーがいるかと思えば、工事現場で働いているような出稼ぎ移民らしき人もいる。中国系、マレー系、インド系、アフリカ系、ヨーロッパ系など、実に雑多な人々が私たちの回りにいる。そんな風景に見とれてのんびりしていると食べることなんてできない。回りの人々を見ると、食事をするにもかなりせかせかしているように思えたのだが、これがシンガポール時間なのである。とにかくまず席を確保し、交代で注文をしに行く。食堂の数も料理の種類も多く、一周してどれにするか大変迷う。注文する時は、テーブル番

号を伝え、料理が運ばれてきたらお金を払う。違う店で色々と注文して、自分ではどこで何を注文したか分からなくなってしまっても、それぞれのお店の方で広いホーカーズのどこからかテーブルを探して料理を持ってきてくれる。よくわからず注文したら、麺類の上に鳥の足（そのもの）がゾロゾロと入っているものが届いた。チキンフィートヌードルというらしい。料金はだいたい一皿5ドル（400円）ぐらい。

シンガポール最後の食事もホーカーズでとった。今回はシンガポールの目抜き通りであるオーチャード・ロード沿いにあるもの。最後ということもあって、総締めとしてみんなでいろんな料理を注文し、とにかく変わった料理を食べてみようということになった。が、これが悪くて、最後になってお腹の調子を崩した人が多かった。アヤシイと思ったら食べないことが一番のようである。

#### (4) ハイ・ティー

シンガポールといえば、ハイ・ティー。19世紀半ばに英国で始まったアフタヌーン・ティーが英國の植民地であったシンガポールにもたらされ、英國人を中心

に受け継がれると同時に、シンガポール式に変化していく。現在では、西洋系、中国系、ローカル系、インド系、その混合型など、さまざま。私たちはウエスティン・スタンフォードの最上階（70階）にあるコンパス・ローズで念願のハイ・ティーを楽しむこととした。純粋な英國風ハイ・ティーを楽しむならラッフルズ・ホテルのティフィン・ルーム（要予約）でとなっていたが、とにかく目の前に色々な食べ物が並んでいる方を選んだのであった。

到着した時は空腹で、ゆったり優雅にという感じはまったくなく、目に入ったものはすべて（？）食べた。場所・料理、料金（25ドル、2,000円）とも満足ではあったが、問題は日本のどこかのホテルで食べている感覚であったこと。つまり、私たちが座った場所の回りすべてが日本人であったことである。日本のガイドブックに大きく紹介されているためか、来る客、来る客すべて日本人。たまにその他のお客が来ると、奥の方に案内され、入口付近から中央まですべて日本人でまとめられていた。これは、外国で日本人がどのようにみられ、どのように扱われているかを考える良い材料だと思った。

## 2. インドネシア編

インドネシアもシンガポール同様、食べ物が辛いか甘いかはつきりしていたが、どちらかといえばより穏やかな味付けだったように思う。インドネシア料理と一口に言ってもさまざまであるが、どこにでもあるのがミーゴレン（焼きソバ）、ナシゴレン（焼きメシ）、サテー（串焼き）、ガドガド（茹で野菜サラダ）、ソトアヤム（チキンスープ）といったようなものであろうか。これらの食べ物は、滞在中1日に2食ぐらいは口にしたほどもある。また、インドネシアもフルーツが豊富で、グアバジュース、ココナツ・ミルクなど新鮮でおいしかった。

#### (1) カクテル

夜、2度ほどみんなでカクテルをのみに行った。シンガポールでも飲んでみたかったのだが、ホテルやナイトクラブで出されるカクテルの値段が恐くて飲めなかつたのである。シンガポール・スリリングにはじまり、アイリッシュ・スリング、マンゴ・タンゴ、それからグラスホッパーやら何やら、変な名前のものまで、みんな違うのを注文し飲んでみた。味が分かる人には、場

#### 山田 有紀恵

所が違うと同じ種類でも味が違うということである。それはバーテンの腕によるのだろう。

ホテルのバーの向こう側ではダンスが始まっていて、リズムにのって楽しそうに踊っている人がいた。フィリピンから来たバンドが音楽をやっている。経済危機のせいか、ホテルのお客はまばらで、なんとなくわびしさを感じた。

#### (2) ビュフェ式朝食

ホテルの朝食はビュフェ式。一見すると普通のバイキングと同じだが、さすが多民族国家でありイスラム教徒が多い国。「これはブタです」、「牛です」といった表示がなされていた。料理は西洋式ブレックファーストを称していたが、パンやオムレツ等の他、インドネシア料理も中華料理のお粥もそろえている。ちゃんとしたホテルのなので、目の前で一人ひとりオムレツを作ってくれるのが嬉しかった。たくさんの品が並んでいるので、あれもこれも食べたりなり、食べ過ぎて気分が悪くなつた日もあったくらいだ。

ホテルのレストランで感じるのは、どの席に案内さ

れるかで、どの程度の人物に見られているかがわかることがある。私たちも入口付近に案内されることが多かった。奥の方や、窓の側など、あちこちに人が座っていて、またたくさん席が空いている時でも、なかなかそちらの方には案内してもらえないことがある。ヨーロッパでは、日本人や日本人の団体客は、だいたい入口付近やトイレの側など、悪い席に案内されがちであるということを本で読んだことがあるが、そんなのを感じた。まあ、Tシャツにパンツ・ルックでスニーカーでは仕方ないか、と思ったりもする。

### (3) ホカホカ弁当

ダルマ・ブルサダ大学訪問で、思いもよらぬ“ホカベン”を食べた。日本のホカホカ弁当が進出しているらしい。「インドネシアにもホカベンがあるんだー」と大騒ぎの末、お弁当を開けてみるとびっくり。大量のごはんに揚げ物、ただそれだけがドンと入っていて、小さく仕切られた2つのスペースは空のまま。日本のホカベンはサラダやつけものなど色々と入っていて、盛りつけもきれいで。そんなイメージしか頭がなかったので、正直言って全員びっくりした。が、それを顔に出しては失礼になる。一人としてそんな驚きや不平を口にしなかったのは、自分たちながら偉かったと思う。味の方は日本とは異なり、ソースがピリっと辛くて美味しいだった。が、揚げ物、揚げ物、また揚げ物では、なかなか喉に通らない。揚げ物の種類は、鳥やその他と違うのだが、調理法が同じだとみんな同じに感じる。ご飯は、たぶん鳥の出汁で炊いてるチキンライスのようで独特の臭いがある。この匂いのために、ご飯が喉に通らないという学生もいた。このホカ弁は、副学長のおゴリであるからにして、こちらではごちそうなのだろう。一緒に食事をとったインドネシアの教授も、学生たちも大変恐縮して食べている。普段の食事は質素な物なのだろうと、一同考えさせられた昼食会であった。

この時大学でいただいた紅茶は、もう、甘いという程度のものではない。砂糖の量がものすごいのである。このお茶も、スタッフによって丁寧に出されたものではあったが、紙コップに入っている。同席したJICA調整員や協力隊の人が言われるには、甘さというのはこんなものではないらしい。インドネシアの風習として、人をもてなすときに極上のあま一紅茶を出すことが最高のおもてなしなのだそうだ。紅茶は甘ければ甘いほど良いらしい。この日私たちがいただいたものは、日本人向けに甘さを控えたもので、異文化から来た私

たちへの配慮があることを知った。

### (4) 生バンドの演奏

インドネシアに来てはじめてちゃんとした夕食をとった。ミーゴレン、ナシゴレン、ガドガド、サテー、魚のフライ、ほかにも机に載りきらないほどたくさん注文してモリモリ食べた。2名の学生は料理の匂いが合わないため、食べられそうな馴染みの物をルーム・オーダーでとったのだが、その他の元気な学生たちはともかく物珍しいものを食べようという意気込みであった。インドネシア料理は、とーてもおいしかった。

食事も中盤にかかった頃、生バンドの演奏が始まった。インドネシア人のバンドがテーブルからテーブルに回って、それぞれリクエストを受けているらしい。「このテーブルにもやって来るだろうか」と噂はしていたけれど、本当に自分たちの所に回ってくるなんて思っていなかった。それで「リクエストは?」と聞かれても、すぐには思い浮かばない。日本人客に慣れているらしく、「スキヤキ? キタグニノ ハル?」と聞いてくる。とっさに「ノー、ノー」というと、ビートルズはどうかと言う。その他レゲーも歌い、踊ってくれた。食事をしながらすぐ側で演奏を聴く、ジョークのやりとりをする、といった貴重な経験をすることができて幸せだった。この後、もちろん彼らにはチップをあげることになっていたのだが、日本人式にたくさんあげすぎた感じもある。やはり経済危機の影響か、この日のレストランはガラガラ。バンドは3つのテーブルを回っただけ。こんなので、生活していくのだろうかと思ったほどであった。

## お わ り に

今回私たちはシンガポールとインドネシアという、同じアジアにありながら異なった背景をもつ二カ国を訪れた。NIESの台頭によって先進国の仲間入りをしたといえるシンガポールと、いわゆる開発途上国のインドネシア。どちらも多民族国家でありながら、欧風文化の色濃いシンガポールと、イスラム色の強いインドネシア。そして両国とも、東アジアに位置する日本とは全く異なった文化をもっている。

この旅では、様々な場所を訪れ、様々な人々に出会った。自分自身の生活に支障をきたさない程度に本音をそっと教えてくれたシンガポールとインドネシアの大学生たち、通訳の人たち、その他関係者にお礼を言いたい。ビジネス・ライクなシンガポール人のつきあい方に触れ、その後で「イエス・ノー」をはっきり言わず、プライドの高いインドネシア人と接触し、言葉以上にコミュニケーションの難しさを感じた旅であった。

多民族・多文化の共生という理想を、欧米の人道主義やポストモダン主義とはまた異なった事情で展開し推進してきたこれらの国々に、日本が学ぶことは多いだろう。またスハルト政権が倒れて、開発独裁下の貧富の差に正面から疑問の声が投げかけられ始め、日本と東南アジアとのかかわりについても再考が迫られているようである。

私たちが帰国してすぐに、インドネシアのジョグジャカルタ近くで大洪水があり、農作物が水につかって被害が出たと報じられた。また、てんぐ熱が流行し、多くの子ども達が命を落としたとも報じられた。それから、インドネシア各地で起こった暴動や軍との衝突。これに連なる火災で何百人の人々が亡くなったのも、ジョグジャカルタであった。外務省からは日本人家族等に帰国が呼びかけられ、多くの日本人が一時帰国をする映像がテレビをにぎわせた。自衛隊はいざという時の日本人救出のためにシンガポールで待機したが、結局出番はなくて戻ってきた。このような中で命を落とされた数多くの人々のご冥福をお祈りするとともに、インドネシアで普通に生きたいと願う人々の生活が保障されるよう祈りたい。

さかのぼって昨年のこの頃、フィールド・ワークの話を少しづつ始めていた頃には、インドネシアで起こった森林火災の話題があがっていた。煙害がひどくて、シンガポールやマレーシアから多くの日本人が一時帰国をするという騒ぎに、フィールド・ワークはだめかな?と不安を感じ、その後のインドネシアの政治・経済状態の悪化で、不安は一気に高まっていたのであった。それでも私たちは行ってくることができた。安全を確かめながら、計画通りに旅を終えたということに、少し自信がついたような気がする。

応援して下さった皆様に、重ねて御礼申し上げます。

梅雨の晴れ間に

浅野 昌子

### 山口県立大学国際文化学部 異文化交流論ゼミ 平成9年度フィールド・ワーク報告書

発行日 平成10年6月1日  
執筆・編集 浅野 昌子、石原理恵子、岩崎 綾子  
采野 恵、山田有紀恵  
監修 岩野 雅子  
印刷 海田印刷